

鶯丸という現象 式く明治の記憶

セキライ@WagtailW 令和元年霜月

嘉吉元年（1441）に第六代室町将軍足利義教より結城合戦の戦功の褒賞として信濃守護小笠原政康に下賜された鶯丸（鶯太刀友成）は、時代を経て明治40年（1907）の茨城県結城市で行われた陸軍特別大演習に於いて当時の所持者の宮内大臣・田中光頭より明治天皇に献上された。これは周知の情報だが小笠原家を離れた時期や献上に至るまでの来歴・所持者に関しては様々な説で溢れている。本研究では諸説に関する資料の内容、発信者、時系列を整理することで明治中頃（22年から26年の間）に小笠原家を離れ、明治32年頃に宗重正が入手、明治39年ごろに宗重正息子の重望より田中光頭が入手という経路がもつとも確からしいことが分かった。本稿では詳細な参考文献を示し鶯丸の明治以降の来歴を明らかにする。さらに鶯丸にまつわる誤伝を紹介する。

目次

1 鶯丸序説	2
2 足利義教	3
3 小笠原家	3
3・1 室町から明治維新まで	3
3・2 明治期の小笠原家と鶯丸	4
3・2・1 明治期の小笠原家概要	4
3・3 明治小笠原家と鶯丸	6
3・3・1 鶯丸を手放した時期の考察	10
3・3・2 遊就館に出陳したる四口について	10

1 鶯丸序説

基本データ^[1]

太刀 銘備前国友成号鶯丸
刃長 81.8 cm 反り 2.7 cm
目釘孔一
足利義教より小笠原政康への感状付。

鶯丸は銘に示される通り古備前¹の刀工友成による太刀である。友成は複数人、最低でも三人おり、鶯丸はその中でも最も古い友成による作と考えられており、友成の確かなる作としても名高い。古の刀剣書によれば友成は永延（987-989）の頃に父実成と一条天皇の佩刀を鍛えたともされている。（実成による有銘の太刀は現存していない。）友成を銘するものには永延より二百年以上時代を下る鎌倉時代の嘉禎（1235年 - 1238年）年紀のものもある。実際に永延の頃であったかや、備前のどこらへんを活動拠点としていたかなどは議論の余地が大いに残るところのようだが詳しくないのでスキップする。

鶯丸の友成を永延の頃の刀工として、時代背景に少し触れてみる。一条天皇の御宇（生没980-1011、在位986-1011）といってもピンとこない人も多いのではないだろうか？ 私は最初わからなかった。むしろ、お後のほうが聞いてすぐ分かるかもしれない。

¹ 古備前と呼ばれた古の時代より備前国は刀剣製作の地として知られていた。古備前とはその備前の福岡（現在の瀬戸内市長船町福岡）に一文字派が興る以前の刀工達を呼称している。

4 献上まで	12
4・1 鶯丸をとりまいた人々	12
4・2 某氏をてんでんととして	12
4・3 宗重正・重望	15
4・4 田中光頭	18
5 畏き辺りへ	22
6 鶯丸の引越し事情・明治編	22
7 小笠原家の祭祀と「鶯太刀祭り」に関して	22
8 鶯丸に関わる誤伝	24
8・1 フクレにより価値がなくなっていた説	24
8・2 宗家において小鳥丸と同時期入手説	25
8・3 対州宗家伝来説	26
8・4 秋元子爵または山本達雄所持説	26
8・5 小笠原家から明治天皇に献上説	32
8・6 銘「君万歳」説	33
8・7 明治天皇の軍刀説	35
9 鶯丸異説	36
9・1 祟る？ 説	36
10 さいごに	37
参考文献	37
表記の諸注意	40
あとがき	40

一条天皇は清少納言が仕えていた藤原定子（990入内）、紫式部や和泉式部がつかえていた藤原彰子（999入内）らをも後としている。これなら私も覚えていて。皆さまご存知の藤原道長は長徳元年（995）に兄が相次いで没したため氏長者となり娘の彰子の入内が999年、摂政になったのは1016年なので永延は道長がブイブイ言わせる少し前の、定子の父であり道長の兄である道隆がブイブイ言わせていた時代である。つまり、藤原氏の貴族政権時代らへんであり、それは武士の台頭の起りともいえる930〜940頃の承平・天慶の乱（関東での平将門の乱や瀬戸内海での藤原純友の乱）から半世紀後で、武士が力をつける切欠となった前九年（1051-1062）・後三年（1083-1087）の役のよりも半世紀前であった。

一条天皇は三条小鍛冶宗近にも佩刀を鍛えるよう命じたとされる。小狐丸の話は有名だが、宮城県にも宗近が刀を鍛えた伝説の残る金蛇水神社があったりする。何故一条天皇に集中して刀鍛冶に関する逸話や伝説が生まれているのだろうか？

さて、現存する友成作で鶯丸の他で著名なものは鶯丸と同様最古期の友成作と考えられている「国宝 太刀 銘備前国友成造」^[2]と少し時代の下るものと考えられている「国宝 太刀 銘友成作（敵島の友成）」^[3]がある。この敵島の友成は平宗経（清盛三男）もしくは平教経（清盛甥）の奉納という説がある^[4]^[5]。また、友成は平能登守教経の佩刀を鍛えたとしても有名で、「君万歳友成」や「桜丸」などの伝承もあり友成は平家とかかわりが深いイメージを持たれているが、平家が瀬戸内に勢力を蓄えだしたのは、十一世紀末に白河法皇が創設した北面武士や検非違使となり力をつ

けた平正盛・忠盛父子（清盛の祖父・父）が備前の国守（それぞれ11320、1127-36）をつとめたのがはじまりとされている^[6]。つまり、最古期の友成に関しては、平家が瀬戸内に台頭するよりも百年以上も前のことである（永延の頃（987-989）とするならば）。鶯丸は友成が作刀してからおよそ四百年後の1441年に第六代足利将軍義教の感状の中に「鶯太刀友成」と記されたことで初めて歴史にその名が刻まれることとなるのだが、千年の歴史を持つ鶯丸という太刀にとってみればそこは折り返し点でしかないことに驚愕する。鶯丸の刀身は千年前の作刀としては十分に健全と言われている。この六百年は小笠原家宝刀や御物として大事にされてきた記録があるが、記録に残らないそれ以前も同様に大事に守り伝えられてきたという結果を為した先達に畏敬の念を抱かざるを得ない。

2 足利義教

鶯丸の最初の記録は室町中期、第六代将軍足利義教が戦の褒賞として信濃守護小笠原政康に友成の太刀を下賜したとき、その感状に鶯太刀友成と書かれていたことである。足利に入った記録は今のところ見当たらない。

義教は鎌倉府の長である鎌倉公方である足利持氏と攻防を繰り返していた。当時、鎌倉府は関東を統治しており、幕府から独立した権限を持つて居たと考えられている。鎌倉公方は室町将軍と同じ足利尊氏を祖としている。義教は将軍就任の際、籤引きで選出され、出家の身であったのをわざわざ還俗したという経緯もあ

り、持氏は義教の将軍就任に強く意を唱えており義教の将軍ライフを通して宿縁の敵であった。最終的に、永享十年（1438）、持氏が関東管領に対し挙兵したことに乗じて義教は小笠原政康ら諸侯を関東に派兵し、翌年持氏を自害に追い込む（永享の乱）。この時、幼い遺児らは逃れる事ができ、永享十二年（1440）年三月に関東諸侯が春王丸、安王丸を奉じて挙兵、結城城に立て籠り、結城合戦が始まる。結城合戦には小笠原政康も副将として参陣したとされる。結城城は平城ながら堅牢で攻城に一年ほどかかったが、嘉吉元年（1441）四月の総攻撃により落城する。

3 小笠原家

3・1 室町から明治維新まで

小笠原家は室町時代、信濃守護職を歴任していた一族である。室町中期の小笠原家の惣領職であった政康は、幕府より任命された守護統治に強く反発する気風であった信濃国人と攻防を繰り返し、平定することに成功する。政康はこれらの数々の戦功により、久国、真長、真宗、来国光の太刀を将軍義教から感状と共に下賜されている^[7]。また永享10年（1438）、幕府と鎌倉公方足利持氏との対立が激化し、関東において永享の乱が始まる。政康も信濃を越えて出陣し、永享11年（1439）には足利持氏を自害に追い込んだ。その翌年に結城合戦が始まると政康は信

濃国人三千騎を率いて参陣し、陣中奉行として戦の采配をしていた。そしてついに嘉吉元年（1441）4月の総攻撃で結城城は落城し、戦は終結した。この時城から逃げる春王丸、安王丸を小笠原政康らが捕えたとされる。政康はこの戦功により、鶯太刀友成II鶯丸を将軍義教から感状と共に下賜された。これは嘉吉元年五月二十六日のことである。感状の内容は以下の通り。

今度結城館事即時攻落凶徒等
悉討捕刺虜春王丸安王丸畢
武略無比類尤感思食候仍
鶯太刀友成一腰遣之候也

五月廿六日（義教花押）
小笠原大膳大夫入道殿

今度結城館の事即時攻め落とし凶徒等悉く討ち捕り剩へ春王丸・安王丸虜り畢んぬ武略比類なし尤も感じ思召し候仍つて鶯太刀友成一腰これを遣わし候なり（読みは信濃史料^[8]より）
鶯丸を下賜された翌年の政康の死後、家督を争って小笠原家は分裂するが最終的には政康の子光康を祖とし松尾城を拠点とした家系に伝わった。この家系は家督争いに敗れ一度は信濃を追われるが武田信玄に臣従し信濃に回復、その後織田、徳川と時流で仕える先を変え命脈を繋ぎ江戸時代には譜代大名となる。幾度かの転封を繰り返した後勝山藩主（二万二千七百七十石）となり明治維新を迎える。鶯丸、久国、真長は江戸時代には第八代将軍吉宗に感状と共に台覧された重宝であり^[7]、特に鶯丸と久国は明治中頃まで小笠原に伝わったことが確認できる。真長もおそらく明

治中頃まで残った一振りでも少なくとも幕末（安政の頃）まで小笠原に在ったことが確認できている^[9]。政康は小笠原家の長い歴史の中でも英傑として崇拜され、結城合戦の戦勝を信州松尾の八幡宮前にて祈願したと言われる三月十五日は小笠原家の特別な祭祀の日として脈々と受け継がれた^[7]。また鶯丸は小笠原家の「第一の至宝」と幕末の小笠原家侍医西門蘭溪は表現している^[9]。

3・2 明治期の小笠原家と鶯丸

3・2・1 明治期の小笠原家概要

明治時代の小笠原家の主要な出来事と鶯丸に関する出来事を表1にまとめる。版籍奉還の後、越前勝山藩主であった小笠原長守は勝山藩の知藩事に任命されるが、2年後には廃藩置県により免官となる。長守は安政5年から勝山藩の江戸上屋敷^[9]であった、日本橋区浜町（中央区久松町）に居を構えた。小笠原家は明治6年に、邸面積の半分を売却し、その地の一部に久松小学校が開校している^[10]。同年、長守は13才の長育に家督を譲り隠居した。この家督相続のために、長育は元服を行っている。この後、小笠原長育は度々転居するのだが、引越し歴は6章で詳しく示す。

明治17年3月から長育は修史館御用係となっている^[11]。修史館は現在の東京大学史料編纂所の前身であり、歴史編纂を目的としていた。この年5月に長育は室町時代からの小笠原家の重宝である足利尊氏将軍からの書状を始めとする【小笠原文書】の写しを作成している^[12]。この【小笠原文書】には、将軍より下賜された太刀に付随していた感状類も含まれており、鶯丸の感状も含

表1 幕末・明治の時代背景と小笠原家

西暦	明治	月	日	事象	文献
1867	慶應3	10	14	大成奉還14日に明治天皇に奏上翌15日奏上を勅許(1867/11/9-10)	
1869	2	7	25	版籍奉還 長守勝山藩の知藩事に任命	
1871	4	8	29	廃藩置県 長守知藩事を免官。小笠原家東京に移住	
1873	6	5	17	長守隠居し長育家督を継ぐ(長育13才)	
1876	9	3	28	廃刀令 大礼服着用もしくは制服警官・軍人以外の帯刀を禁止	
1884	17	3		長育修史館御用掛に(19年まで)	[12][11]
1886	17	5		長育・小笠原文書の写しを作成(鶯丸・久国・真長の感状を含む)	
1888	19	7		長育・子爵に授爵	
1889	22	11		長育明宮の侍従に任命(御用掛は解任)。	[19]
1892	22	11	3	長育・鶯丸と感状を遊就館一般公開に出陳	[21]
1893	24	7	24	長育明宮の立太子により東宮侍従に小笠原長守死去	[24]
1894	26	5		長育・小笠原文書を装丁(鶯丸・久国・真長の感状が含まれない)	
1895	27	7	25	日清戦争勃発	
1899	28	1	9	長育死去(長男の勤一は9才)	
	28	4	17	日清戦争終結	
	28	1		勝山小笠原家伝来の延寿国友の長太刀が宗重正から加藤正義へ	[25][26][27]
	32	2	5	今村長賀・鶯丸が小笠原家になきことを語る	[13]
	32	7	5	宗重正が某氏より鶯丸を入手した新聞記事が出る。	

示する施設として明治11年に開館した。当時の館長は明治の刀剣界重鎮で宮内省の御剣係でもあった今村長賀である。この頃、春と秋の例祭にあわせて遊就館では旧藩主所蔵の名刀の一般公開などが行われていた。この明治21年の秋の例祭への主な出陳目録は、当時の新聞で確認できる。また、後の鶯丸の所有者となる田中光頭も太刀を出陳している。

【読売新聞明治21年11月6日】^[17]
 『靖国神社大祭』

今明両日は靖国神社の大祭なるが同社にては社殿脇へ一の暇屋を設け豫定の如く昨日午後七時より旧久留米藩士真木和泉守他十七名の招魂祭をも執行し本日は競馬、明日は能及び富士見町木村官兵衛の奉納に係る競馬あり尤も雨天なれば順延との事又右大祭に付同境内の遊就館は昨日より大祭中臨時総覧を許さるるよしなるが今度諸家より同館へ出品ありし内著しきもの左の如くなり
 ○宮内省より金装の御太刀○子爵小笠原長育氏より備前友成刀(鶯丸と称す)但足利義教將軍感状添(略)○子爵田中光頭氏より一文字貞真太刀、備前国一文字助宗太刀(略)

また、この遊就館に先立ち東京朝日新聞では展示の目玉として鶯丸の記事を載せている。(東京朝日には目録自体は載っていない。)
 【東京朝日明治21年11月2日】^[18]
 『宝剣鶯丸』

旧勝山藩小笠原家において祖先より伝来の鶯丸と名づくる宝剣は其初足利義教將軍の佩刀なりしを同家の祖先たる大膳大夫長春といふ人が賜はり爾後引き続き今日まで伝来せしものなるが作は備前

友成長さ凡そ二尺三寸おいて友成の作よりも最も見事の出来なるがごとく光芒陸離一見人をして寒からしむるものなるを今度靖国神社境内なる遊就館より出品して来る六日の大祭より諸人の縦覧を許すよし
 この頃から、鶯丸は友成の作で最も見事の出来と高く評価されていることがわかる。
明治22年春長育鶯丸を骨董商にみせたるを回顧
 小笠原家が藩主であった勝山の郷土史を昭和初めにまとめた『勝山藩古事記』に小笠原の宝刀として鶯丸のことが書かれている。その中で、明治22年5月に長育が「鶯丸を骨董商に見せた時のこと」を回顧していたことを記している。

【勝山藩古事記】^[19]
 『宝刀鶯丸の由来―鶯丸に付挿話の一節』

明治二十二年春小笠原長育公は佐竹子爵と同伴して江州に在る新羅三郎義光の墓に展墓せられたり(佐竹家も小笠原家と同様源家の末裔なればなり)其時大坂に立寄られ大坂築地の旅館敷竹樓に滞泊せられたり依て小生直に竹敷樓に於て小笠原子爵長育公に伺候したり座談たまたま鶯丸の事に及ぶ長育公語て曰く
 先年東京麹町区富士見町の邸に住せらるる頃某骨董商は小笠原家の宝刀鶯丸を拝見せんことを再三乞出たり依て只拝観のみを許されたり某商大に喜び(略)小笠原邸奥座敷に於て(略)恭しく再拝黙礼して手に受け先其作を觀して後刀身を拝観せんと鯉口より鞘を二三寸離したると時、時あたかも障子の外庭園において

まかれていた。明治19年11月には修史館御用掛の任を解かれ明宮(後の大正天皇)の侍従となり、明治22年11月には立太子により、東宮侍従となっている。明治24年7月に長守が死去し、その4年後日清戦争の最中に長育も没している。長育が死去した時長男の勤一はまだ9才だった。

3・3 明治小笠原家と鶯丸

明治時代の小笠原家と鶯丸に関して正確な記述をしている刀剣書資料は実はなく、鶯丸の小笠原における確実な記録は明治21年と22年の靖国神社境内の遊就館展示に関する新聞記事である。そして、それ以降のどこかで小笠原を離れているが、それが何時頃であるか信頼に足る記録はない。小笠原にないことを示す最も古い明確な記録は、明治32年2月5日に今村長賀が遊就館における刀剣講話において「故あって小笠原家になし」と語っていることである^[13]。小笠原家重宝の小笠原文書から、鶯丸の感状が明治26年5月には失われていることから鶯丸は明治22年11月以降、26年5月以前に売却されたと推測する。

本節では、明治期小笠原家における鶯丸の記録を包括的に記す。また小笠原家からの売却の時期に関する考察を行う。
年月未詳鶯丸世上に出たる時
 【銘刀押型・御物東博】^[14]

明治初年にこの太刀が世上に出て、当時の愛刀家や鑑識家の中でいろいろやかましく議論されたという話が伝えられている。まず、「明治初年」と書かれてはいはいるがこれは明治元年を指し

ているわけではないし、明治初頭ですらない可能性も高い。古い本だと「初年」の使われかたは、けっこういい加減な事が多いのでこの表現をもって「明治の頭の頃に鶯丸が世上に出た」と同定はできない。私見だが後述の明治21年11月の遊就館展示が世上に出た最初ではないかと思う。または、小笠原家を出たことを「世上に出た」とする表現なのか不明である。

また、「いろいろやかましく議論された」の表現からネガティブな印象を持つかもしれないが後述に示す様々な資料の通り明治時代において鶯丸は非常に高い評価を受けている。
明治17年5月小笠原文書の写しをつくる

小笠原長育が修史館の御用掛のとき、室町時代からの小笠原家の重宝である家伝の文書【小笠原文書】の写しを作成している。⁶
 【小笠原文書】の写しは天保3年^[15]と明治17年^[12]の二回作成されており、どちらも修史館を前身に持つ東京大学史料編纂所蔵となっている。また、【小笠原文書】の原本もほとんどが同じく東大史料編纂所蔵である^[16]。

この時の文書の写しの中には、鶯丸、久国、真長の太刀が足利義教より小笠原政康に下賜された時に添えられていた感状も含まれている。

明治21年11月遊就館展示

鶯丸は11月5日から3日間ほど、靖国神社境内の遊就館において小笠原長育より出陳され、足利義教からの感状(小笠原文書の一部)と併せて一般公開されている。遊就館は靖国神社境内にあり、陸軍管轄で古来の武具などを展

鶯の鳴声高く二声某商驚きて忽ち刀身を治め平伏恐縮して凡人の拝観すべきものならずとて辞し去りたり(是某商の拝観も啼鳴を聞きしも皆偶然の出来事なりと云うは夫迄なりしかしながら不思議と云うは不思議といはざるべからず鶯も春先の時候とは云え毎日の如く来鳴くものにあらざるべし)

内容は要約すると、某氏の回顧として「明治22年に先祖の墓参りて大阪に滞在していた長育に会ったら、長育が『先年、麹町区富士見に住んでいた頃骨董商に再三頼まれて鶯丸を拝観させたときに鯉口を少し切ったときに鶯が鳴いたもんだから、骨董商はびびって刀身をおさめてひれ伏し恐縮して凡人の拝観すべきものではないと辞して去っていった』ということを回顧していた」となる。

ごく最近に(ここ一年くらい)明治21、22年の遊就館展示の新聞記事が掘り起こされるまで鶯丸が小笠原家を離れたのは、明治15年より前であると著名な刀剣書に書かれていたため(詳細は8・2、8・3参照)、鶯丸を手放した後に長育が回顧したものであると考えられていたが、明治22年秋にはまだ小笠原家が鶯丸を所持していたことがわかるため、この回顧自体も鶯丸がまだ手元にあるときのものであることが確定した。

小笠原家は明治時代に幾度も引越しをしていることは本研究の調査により判明しているが(詳細は6章)、「麹町区富士見に住せらるる頃」と記述されているもの実際に富士見に住んでいたかどうかはどうしても突き止められていない。この記述と関係があるのかは不明だが、この22年春以前に鶯丸が展示されたこと

のある靖国神社遊就館の住所は麹町区富士見である。様々な情報でコンガラガッチしている可能性はないだろうか？ただし、展示は今のところ見つかったのは秋で、某商に見せたのは春先のこととして回顧しているようである。
明治22年11月遊就館展示

鶯丸は遊就館にて11月5日から3日間一般公開され^[20]、21、22日には招待客に公開されている^[21]。この公開が現在のところ小笠原家に在ったことを示す最後の記録である。

通常、大祭当日の新聞に掲載される主要出品目録^[20]には鶯丸は掲載されていないが、後日招待客に公開されていたようで、今村より招待された雲錦を名乗る人物が参観記を読売新聞別刷りに寄稿しており、その中に小笠原家より鶯丸の出陳が確認できる。⁸
 この時は、厚藤四郎(徳川達孝)田安徳川家出陳をはじめ特に多くの名物が出陳されている。(明治2年、招魂社として発足した靖国神社の式年遷宮の年だからだろうか?)

【読売新聞明治22年11月26、27日(別刷)】^[21]
 『遊就館参観記』 雲錦生

去る二十二日九段坂の上招魂社の遊就館へ参観せり。本館は陸軍省の所屬にして内外国をとほす今古を論ぜず戦争の用具及び一切の武器圖書等を陳列して庶人の縦覧に供する處なり。春秋二季の招魂祭には殊に諸家の珍蔵を招集して常よりも一層相関をなすを
²厚藤四郎は最近の刀剣書には明治時代に徳川御三卿の一橋家にあつたと書かれているが、正しくは田安家である。この、遊就館の展示記録は田安家にあつたことを伝える貴重なリアルタイム情報である。詳細は筆者別稿^[22]を参照のこと。

例とす。依て過日の大祭にも諸家よりの出品数多ければ二十一日二十三日両日を期して特に紳士貴客又篤志の人をも招きて親しく縦覧をせらるるに付き予が如き古癖生にも主館今村君より懇厚なる招請を辱^{かたじけなく}のふして午後より館に昇り盲眼を喜ばせることとはなりぬ。ここに出品の一斑を記さんに名物

厚藤四郎吉光の短刀 徳川達孝君出品
鶯丸と称す
古備前友成の太刀 小笠原長育君出品
足利義教將軍より小笠原大膳太夫へ下さる所
備前国一文字助宗の刀 田中光顕君出品
藍革威の腹巻 宗重正君出品

この時の展示では、後に鶯丸を手に入れる宗重正と田中光顕も出陳している。(4・1で詳しく説明するが、遊就館館長の今村長賀と両名は関係の深い刀剣仲間である。)

ちなみに、明治時代の献上前に鶯丸といわゆる面識のある「刃剣乱舞実装刀」(令和元年十一月現在)はこの厚藤四郎だけである(筆者調べの範囲内で)。ネット上で良く言われている、鳴狐と同じ家(秋元子爵家)にあったというのは誤りで、小鳥丸と同じ家(宗伯爵家)にあったが時期は重ならない(詳細は8章)。

³ 他、尾張徳川より、上野貞宗、包丁正宗、戸川志津、井伊家より荒波一文字、黒田家より岡本正宗など多くの名物などの出陳も認められる。

3・3・1 鶯丸を手放した時期の考察

確かなことは、明治22年1月に鶯丸が小笠原家より遊就館に出陳されていること、明治26年5月の【小笠原文書】目録には鶯丸の感状が書かれていないこと、明治32年2月には小笠原家からは出ていることである。鶯丸は22年1月から26年5月までの3年半の間はどこかで小笠原家から離れたと考えられている。その間に、小笠原では明治22年1月に長育は侍従をしていた明宮の立太子により東宮侍従となり、明治24年には最後の勝山藩主で先代の長守が亡くなって、12月に青山に引っ越している。また、装丁を行った2年後の明治28年に、長育は35才の若さで亡くなっている。

宗重正が入手した時の新聞記事(明治32年7月5日)^[25]には以下の様に書かれている。(本資料は4・3で詳細を議論する)

《鶯丸は》同家《小笠原家》に於て上なき寶物として永く子孫に伝へ先年同家より栗田口久國の太刀他二口と共に遊就館へ出陳せしこともあり然るに同家改革の際此四品は去る人の手に流れて久しく踪跡を知る能はざりしが《宗重正が手を尽くし捜索して云々》明治21か22年に遊就館に出陳した四口の刀を一度に売却していることを示しており、【小笠原文書】の再装丁は、宝刀《鶯丸久國、真長》を感状と共に売却したことを契機として行ったのではないかと推測する。

また、8・5で詳しく考察するが、大正から昭和初頭あたりにまとめられた小笠原家の歴史を含む信州と勝山の郷土史それぞれ

明治26年小笠原文書装丁—鶯丸感状含まれず

明治26年5月に、長育は室町時代より家伝の文書【小笠原文書】183通を4帳に装丁している。この時の目録は現存していないようだが、明治31年に目録を写したものがある^[23]。この183通は、現在原本が確認できる数と一致している。この【小笠原文書】は天保2年や明治7年に写しが作成されているが、その写しから5通の原本が逸していることが、【影写本 小笠原文書】の解説^[24]に書かれており、この逸失五通のうちの一通は鶯丸の感状である。この逸失五通のうち鶯丸の感状を含めた三通は、足利義教から戦功の褒賞として太刀(鶯丸、久國、真長)を下賜された時の感状である。鶯丸は現在も感状が添えられており、久國も小笠原を出た後も感状が添えられていることが分かつて(後述)9ので真長も感状と共に売却されたと推測される。

明治26年に装丁された小笠原文書183通のうち北条早雲差し出しの4通は神奈川県早雲寺所蔵で、のこり79通は昭和26年に東京大学史料編纂所に譲渡されている^[24]。
明治32年2月今村長賀鶯丸小笠原になきことを語る
今村長賀は2月3日の遊就館における剣話会において、小笠原家にはすでに鶯丸がないことを語っている^[13]^[26]。

先ず友成で確かなものは、越前勝山藩主小笠原家に、足利義教將軍より拝領した感状付の鶯丸と云ふ太刀があった。是は生中心で、太刀銘に備前国友成と長銘に切つてある。只今故あつて同家にはなく、他へ出て居ります。

において、長育時代に小笠原より献上と書かれている。このことから、長育亡きあとに小笠原家内において、鶯丸が売却されたことについては正確に伝わっていないことが推測される。

3・3・2 遊就館に出陳した四口について

宗重正が手に入れたとの新聞記事には、遊就館に鶯丸と久國他二口が小笠原家より出陳されていたことが書かれている。この四口の素性に関して考察する。
実際に遊就館に展示された四口であるかの確定は難しいが、明治まで小笠原家にあつたと思われるのは以下の四口である。

●太刀 備前国友成 号鶯丸

結城合戦褒賞として嘉吉元年(一七三二)足利義教より小笠原政康へ
小笠原を出た後でんとし、明治32年宗重正↓重望↓田中光顕を経て明治天皇に献上され現在御物。
義教の感状が添えられている。

●太刀久國(栗田口)

永享8年(一四三〇)足利義教より小笠原政康へ
宗重正入手(時期不明)。宗家に明治35年まではあったことが確認されているが^[27]、その後は不明。宗重正が鬼丸の太刀拵を新調。
義教の感状が添えられている^[28]。

●太刀真長

永享8年(一四三〇)足利義教より小笠原政康へ

小笠原家を出た後不明。
義教の感状が添えられているものと推測される。
●長太刀 延寿国友
小笠原の記録には来歴見当たらず。
宗重正入手(時期不明)。宗重正から加藤正義に明治28年に小倉惣右衛門の仲介で5000円で売却^[29]。息子の正治のときに旧国宝指定を受け(昭和6年12月14日)^[30]、昭和22年12月1日付で帝室博物館に所蔵が変更されている^[31]。現在も東京国立博物館蔵の重要文化財。
基本データ^[32]

太刀 銘左衛門尉藤原国友 裏銘正中元年□月日 刃長301 反り3.5 鎌倉時代・正中元年(一三三二)

まず真長についてだが、この刀が明治まで小笠原家に残っていたことを示す明確な資料は残されていないが、天保3年および明治7年に作成された小笠原文書の写しには真長の感状が残されているが、明治26年の装丁時には残されていないため、鶯丸や久國と同様に太刀と感状がセットで売却されたのであろう。
次に久國と延寿国友について考察する。延寿国友の長太刀については、今のところ小笠原家側の資料において記述は見つかっていない。小倉惣右衛門は宗重正の蔵刀を語る上で《宗伯爵が》御集めになりました中で、著名な物は小笠原家にありました鶯丸友成の名刀、栗田口久國の刀、延寿国友正中年号付の長刀等を一連にして名刀揃いのもので^[28]

4 献上まで

4・1 鶯丸をとりました人々

小笠原を離れてからの鶯丸の軌跡には、明治中旬の刀剣界において中心的な役割を担っていた「刀剣会」の面々が深く関わっている。また、「刀剣会」の中心的人物を多く輩出した、本阿弥平十郎成重一門の存在が大きい。
明治刀剣界には二大潮流があつた。そのひとつが、本阿弥平十郎成重一門で門下には今村長賀、田中光顕、西郷従道、岩崎彌之助などがいた。もうひとつが本阿弥長識門である^[36]。平十郎は、宗重正の献上した小鳥丸を研いだ人物でもある。重正は明治15年の平十郎の百日忌を兼ねた追善会にも出席しており、このころから重正と平十郎一門との交流があつたこともうかがえる。「刀剣会」(後の中央刀剣会)は明治33年に38名の発起人の元発足した。この38名の発起人には、宮内省御剣係の今村長賀と別役成義、鶯丸の所有者となつた宗重正と田中光顕などが挙げられる。他にも、静嘉堂創始者で三菱二代目社長の岩崎彌之助が居り、初代会頭は西郷従道、次の会頭は谷千城⁴である。他旧大名、政治家、実業家によるそうそうたる顔ぶれであつた。「刀剣会」は旧来の本阿弥的な掟墨守主義に反対し合理的な新感覚で刀剣に取り組もうとする集まりで、明治刀剣界の主流となつた。発起人には名を連ねていないが、発足当初から会誌には秋元興朝子爵、静嘉堂初

⁴ 谷千城は田中光顕と同じく元土佐藩士で光顕と同じく龍馬暗殺直後の近江屋に駆け付けた一人。当時龍馬暗殺犯は新選組とされ近藤勇の処刑を谷は強く主張。

と表現し、また加藤正義の蔵刀を語る中で
宗伯爵家にありました延寿国友の長太刀の御依頼を受け、加藤先生にお取次ぎ致したのでありますが(略) 身長二尺九寸三分(略) 此の刀はそれ以前は小倉小笠原家の御分家に有りました名刀で例の有名な鶯丸友成、又、足利家感状の添つて居る久國の刀などと共に宗伯爵家に入りました物と承ります^[27]。
と記している。また、今村長賀は延寿国友に以下のように記述している。

【九段刀剣談叢】^[33]
『九州の刀工』
爰に肥州菊池鍛冶にて左衛門尉藤原国友と八字銘、裏に正中年号有之刃の長さ二尺九寸三分、反り一寸二分六厘、表裏樋至つて見事にて元巾一寸二分同厚さ三分の大刀があります。是れは根元子爵勝山小笠原家に伝わつておりましたが、只今は郵船社副社長加藤正義氏の所蔵であります。

一方、今村長賀は剣話会(明治34年10月6日)において、小笠原家伝来で加藤所蔵の太刀と同じく延寿派の「肥州菊池住左衛門尉国綱」^[34]として居るが、延寿国友の「左衛門尉藤原国友」が正しく、後に訂正したのである。
惣右衛門の記述にある通り、「明治28年に国友を宗家から加藤正義に売却」「久國、鶯丸、国友が共に宗家に入った」というのに対し、明治32年の記事において「鶯丸を此程手に入れた」の表現がある。重正は久國、国友を先に入手し、鶯丸を後から入手した可能性がある。(この件は4・3宗重正の項で再び触れる。)

代館長の重野安繹、高瀬羽阜、山本達雄などの名前も見られる。
ここに挙げた面々の多くは鶯丸の来歴に関わっている。所有者だつた宗重正、田中光顕は言うまでもなく、今村長賀は鶯丸を展示した遊就館の館長でもあり、重野安繹は、小笠原を離れ行方不明となつていた鶯丸の行方を知る人物の親戚である。安繹は岩崎彌之助の学問の師であり、岩崎の創始した静嘉堂の初代館長である。秋元子爵と山本達雄は何故か、宗家から鶯丸を買つたという説がある人物である。(実際はそんなことない。)表2に刀剣会と鶯丸まわりの時系列とまとめ、図1に人物相関をまとめる。

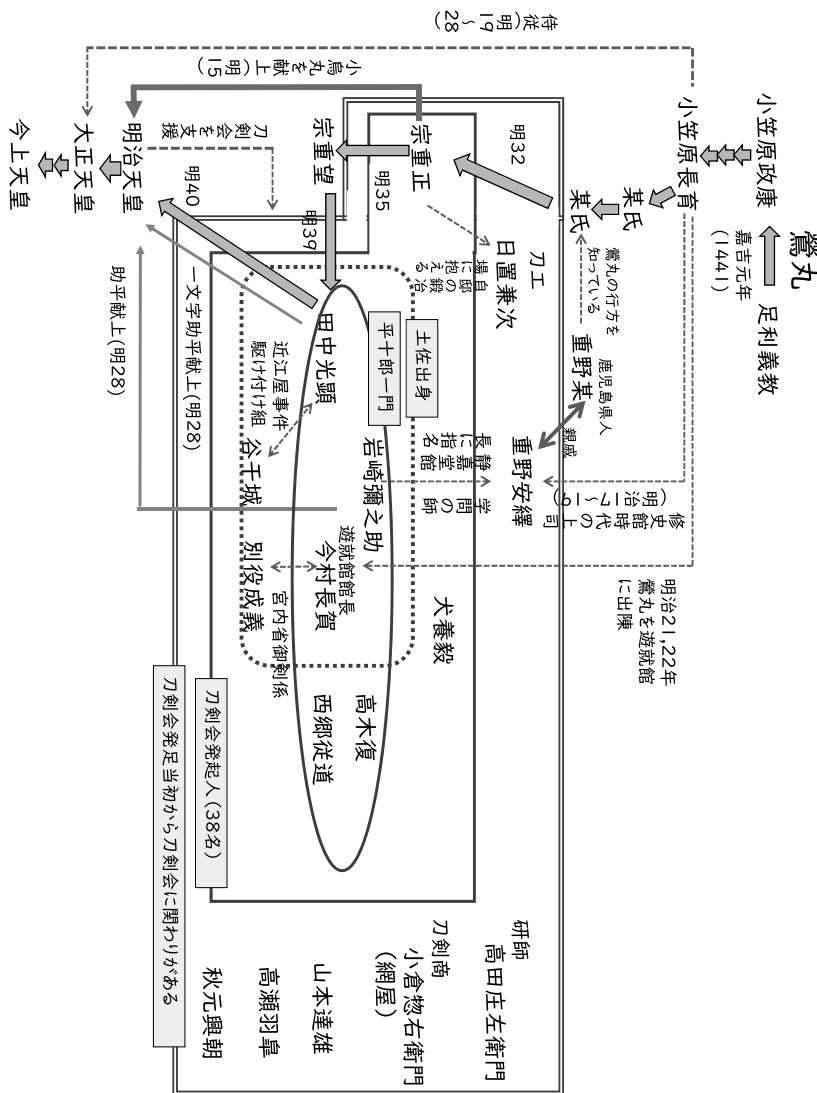
4・2 某氏をてんてんとして

鶯丸は小笠原家を離れて、宗重正が入手するまでの間に幾人かの人物を経由しているが、この間の来歴は明らかにしていない。12重正が入手したことを記す明治32年の読売新聞の記事には、遊就館に出陳された鶯丸と久國と他二口が小笠原家の改革の折去る人の手に流れてからしばらくは行方がわからなくなつていてところを宗重正が探し出した、という旨が書かれている(記事詳細は、次節に掲載)。この記事からは、少なくとも二人以上の手に渡つたようである。鶯丸が小笠原家から宗家に直接入つたとも受け取れる表現の書籍もあるが、このこのリアルタイムの新聞記事及び、明治35年に今村長賀も「故あつて同家《小笠原家》にございませぬ。他へ出て居り夫れより宗家に納まつております。」^[37]という表現を用いていることから、宗家より前に小笠原家ではない人物を経由しているのは確実である。宗重正が誰から購入したか

表2…刀剣会の面々

明治	月	できごと
9	3	廃刀令
13	頃	宗重正、小鳥丸を手に入れる
15	3	宗重正、小鳥丸を明治天皇に献上。
19	-	今村長賀、遊就館館長に就任。
21	11	遊就館に鶯丸出陳(小笠原)。田中光頭は一文字助宗出陳。
21	11	遊就館に鶯丸出陳(小笠原)。田中光頭、宗重正も出陳あり。
28	1	田中光頭、一文字助宗を岩崎彌之助の助平と共に日清戦争中の広島大本営で献上
31	5	遊就館で第一回剣話会(今村長賀、別役成義)開催
32	2	今村長賀、剣話会で「鶯丸は故あって小笠原にない」と語る。
	6	宗重正、邸内に鍛刀所を構え、日置兼次を居らしむ。
	7	宗重正鶯丸入手の記事が出る
	8	宗重正邸に於いて月例で刀剣鑑賞会開催の記事が出る
33	8	刀剣会発足発起人に宗重正、田中光頭、今村長賀、別役成義、岩崎彌之助他
35	4	今村「鶯丸は小笠原からよそへ出て、今は宗伯爵所持。」と刀剣会誌に寄稿。
35	5	宗重正没する。
35	5	小倉惣右衛門と堀部直臣、鶯丸と久國を宗家で拝見(重正生前か不明)。堀部、前夜に鶯丸の夢を見る。
38	8	刀剣会に宮内省より下賜金(十年間で二万)。
39	-	田中光頭、鶯丸を宗重望から購入。
40	10	田中光頭、伯爵に。
40	11	田中光頭、鶯丸を結城特別大演習で明治天皇に献上。
42	6	田中光頭宮内大臣辞任。

図1…鶯丸と明治刀剣界の人物相関



は不明であるが、鹿児島県人の重野某が行方を知っていたため伝手をたどって入手している。読売の数日後に出た東京朝日新聞では、「重野某が鶯丸を所持していた」という書き方になっているが[39]、朝日の方は、コラム的などころにちよろつと書かれていたもので取材をしたというよりは読売の記事を斜めよみしたの書いたものではないかという気が私はしている。この重野某は重野安禪の親戚で、安禪は先述の通り刀剣会の会員であり、鶯丸の小笠原からの売却先との関連は不明であるが小笠原長育が修史館時代の上司でもある。

4・3 宗重正・重望

宗家は鎌倉時代から明治時代まで、対馬などを支配した北部九州の豪族、大名であった。出自は平知盛(清盛の三男)の後胤を称しているが、大宰府の役人であった惟宗氏が武士化したといわれている[38]。宗重正は対馬府中藩の最後の藩主である。版籍奉還の後、宗重正は(対馬藩のこと)の知藩事に任命され、廃藩置県で免官となる。宗家は、江戸時代李氏朝鮮との貿易を担っていたため明治には外務大丞(今でいうところの外務省高官)を務めていた。宗重正は愛刀家としても知られており、平家の重宝との伝承を持ち集古十種に載る伊勢家伝来の小鳥丸[40]を入手し、その数年後の明治15年3月に献上している[1]。明治32年6月には自邸に鍛冶場を設け日置兼次を居らしめていた。また、自邸に於いて刀剣鑑賞会を開催し日置兼次にも名刀の蒐集を命じていた[41]。

重正は小笠原家の鶯丸と久國と延寿国友を所持しており、鶯丸と久國には感状が添えられていた[28]。明治32年7月5日の読売新聞に宗重正が鶯丸を入手したことが記事となっていて、「種々交渉の末此程遂に夫の鶯丸を買ひ取りたる由」と表現されていることから、明治32年7月以前のそう遠くない時期に入手しているであろう。明治32年2月3日に今村長賀が「鶯丸は故あって小笠原にない」と語っているものの、宗重正所有には言及しておらず、一方、明治35年4月の刀剣会誌の記事においては「故あって同家(小笠原家)にごさいます。他へ出て居り夫れより宗家に納まつております。」と記述している。今村は刀剣講話などにおいて宗重正所有の刀剣に関してわりとべらべらと喋っているため、この明治32年2月時点ではまだ重正所有ではなかったのではないかと推測する。2月以降入手は、記事中表示の「此程」と矛盾しない。時折、宗重正が小笠原家から購入したと受け取れる記述をしている書籍もあるが、宗重正が鶯丸を小笠原家以外から購入していることは、リアルタイム情報である新聞記事の表現と宗重正と懇意であった今村の表現は一致している。重正の前の所持者は「重野某が知っていた人物」なのか、「重野某」であるのかは表現が不明瞭で定かでない。東京朝日には「重野某」が所持と書かれているが、読売のほうが記事も詳細で宗重正もしくは関係者に取材しているのではないかとと思われる。

【読売新聞 明治32年7月5日】[25]

『足利義教の刀 鶯丸』

越前某地の旧藩主某子爵重代の寶刀に鶯丸と呼ぶがあり能登守

教経の佩刀を鍛たる備前友成の作にて長二尺四寸、足利將軍義教の蔵する所なりしが義教故ありて之を某家の遠祖に與へ自筆の感状を添へければ同家に於て上なき寶物として永く子孫に伝へ先年同家より栗田口久國の太刀他二口と共に遊就館へ出陳せしこともあり然るに同家改革の際此四品は去る人の手に流れて久しく踪跡を知る能はざりしが旧対州候宗子爵は刀剣の鑑識に富みて『略』鶯丸の行衛に就ても大に苦慮する所ありしに先比鹿児島県人重野某氏(安禪博士の親族)其所在を知るよし風聞せしかば子爵は伝を求めて某氏を尋ね出し種々交渉の末此程遂に夫の鶯丸を買ひ取りたる由

【東京朝日新聞 明治32年7月1日】[39]

『足利義教の刀』

越前某子爵家に伝わりし寶刀鶯丸は備前友成の作にて足利義教の蔵せしを手書を添へて某子爵に賜りしが其後轉輾して所在知れざりしを対州宗子爵百方搜索し重野某の手に在るを知り之を購ふて家に蔵す

宗重正邸において、明治三十年頃から刀剣鑑賞会が開かれていたことはいくつかの資料に書かれているが、鶯丸を入手した記事の翌月に記事にもなっている。(重正は子爵でなく伯爵。)

【読売新聞明治32年8月4日】

●刀剣会 宗子爵の愛刀癖あるよしは人の知る所なるが秋元子爵其他同好の貴族は日本刀の海外に流出すると防ぐ為め評議の上一の刀剣会を興し翌今月宗家に一回づつ集會を開く由

宗重正は、勝山小笠原家伝来の太刀を鶯丸を含めて三振所持し

ていた。小倉惣右衛門の記述では、今一明確でない表現であるが3・3・2で示した通り、今村長賀の記述とあわせて鶯丸、久國、延寿国友は小笠原家由来であることがわかる。

【名士と刀剣】小倉惣右衛門

『宗重正』

『略』明治三十年以降に宗重正邸で催されるようになった刀剣鑑賞会に關して。出席者には、田中光頭、今村長賀、別役成義など。筆者である小倉惣右衛門も。』

宗伯爵は以上の如く御自邸で毎月剣會を開催された程の御嗜好家でありましたので、日置老を使喚されて盛んに蒐集になり、又、御持も盛んにご注文になりました。御集めになりました中で、著名な物は小笠原家にありました鶯丸友成の名刀、栗田口久國の刀、延寿國友正中號付の長刀等を一連にして名刀揃いのもので、此の友成・久國の二刀には足利家の感状が添って居りましたが、御取入れの際、此の久國には鬼丸の太刀拵を御新調になりました。

【名士と刀剣】小倉惣右衛門

『加藤正義』

私が先生に初めてお目にかかりましたのは明治二十八年で、浅田先生の紹介により、宗伯爵家にありました延寿國友の長太刀の御依頼を受け、加藤先生にお取次ぎ致したのでありますが、此の刀は生中心で『中略』刀の説明『長太刀としては誠に無難な良い物でありました。何分初めて刀をお取り入れになるといふ訳で、ご注意深いご性質から念には念を入れると云う次第で、故今村先生其他御証言も求められてお取り入れになり、その時の値段は五

百円でありました。此の刀はそれ以前は小倉小笠原家の御分家に有りました名刀で例の有名な鶯丸友成、又、足利家感状の添ってある久国の刀などと共に宗伯爵家に入りました物と承ります。

惣右衛門によると、「明治28年にこの延寿国友は宗重正から加藤正義に500円で売却」とある一方で「鶯丸、久国と共に宗家に入ったと承っております。」とも記述している。延寿国友と鶯丸が同時期に宗家に入ったならば、28年以前ということになるため32年の新聞記事と一致しない。延寿国友の売却は惣右衛門が斡旋しており、また久国の拵えはおそらくは惣右衛門に注文していたと思われる(宗重正は網屋に拵えをよく注文していた。)この二振りと惣右衛門は直接関わっているが、鶯丸との直接の関わりはなさそうである。久国と延寿国友を先に入手していたが、鶯丸は後から入手したのではないだろうか? 「此程遂に鶯丸を買い取りたる」という表現の新聞記事も深読みすると、そう読めなくもない? 久国のことがわざわざ触れられているが、鶯丸の入手しか話題にしていない。また、4年以上前のことを「此程」と今更記事に書いているのもタイムイング的に少し変な気がする。

宗重正が鶯丸を入手したのは明治32年で、それ以前に久国、延寿国友を入手、国友は28年には加藤に売却していたという時系列がやはり可能性が高いと推測するが、28年以前に三振り同時に入手の可能性も否定できない。

また、宗家における鶯丸のエピソードとして小倉惣右衛門と愛刀家の堀部直臣が鶯丸と久国を見に行く前夜、予想以上の名刀であるという夢を堀部が見たという話がある。

たのだから、愛刀家が宗家の名刀を取り出してもおかしくはない。惣右衛門が堀部を語る中で、「明治35年秋に堀部が加藤正義らを招待して剣会を催したことが原動力となって一時大に発展した」という話があるので[43]、その関係ではないだろうか。そうであるならば35年秋のことなので重正没後となる。(この話題は8・4で再度触れる。)

35年に重正が没し、日露戦争(明治37、38年)後の明治39年に田中光頭は鶯丸は売却された。このことは田中光頭本人が「結城の前年に、宗重望から買った」と証言していることからわかる。父親の刀剣仲間であり風格ある古刀を好む田中光頭は売却先として至極自然なチョイスであろう。

4・4 田中光頭

田中光頭は幕末は元土佐勤王党の維新志士で、陸援隊の幹部であった。龍馬暗殺の近江屋事件の後に現場に駆け付けた一人で、陸奥守吉行の様子を記録に残している[44]。維新後は明治政府に出仕。明治31年から42年までの長きにわたって宮内大臣を務め、宮中において強大な影響力があったとされる。

宮内大臣であった頃の明治40年1月に茨城県結城市で陸軍特別大演習があり、その大本営にて鶯丸を献上している。光頭はその前年に鶯丸を宗重望から購入している。このことは、光頭が昭和晩年のインタビューで答えていることに加えて明治42年8月に東京日日新聞で高瀬羽卓が連載していた【刀剣談】において、3年程まえに宗伯爵から購入したと書いていることからわかる。

【名士と刀剣】小倉惣右衛門 [27]

『加藤正義』

明治35年に五條子爵が加藤家に来られ、宗伯爵所蔵の栗田口久国足利感状付の刀の事を話されたので、加藤先生は私に代理で見に行く事をご依頼になりましたが、私も一人で行く事は困りますので、堀部先生に御同行をお願いし、又、久国の一刀だけを拝見して相談にならぬ場合に困りますので、五條子爵には鶯丸友成も共に拝見致したき由申し込みました。然るに約束の前夜、鶯丸は予想以上の名刀なることを堀部先生が夢に見られた等の珍談もあり、面白い時代もありましたが是等も皆昔をしのぶ夢物語となりました。

堀部直臣が夢に見るほど鶯丸は名刀との呼び声が高かったと言えよう。堀部自身もかなりの愛刀家で、これ以前に現国宝の一字助光の太刀を破格の1500円で購入して話題になった人物である(詳細は8・4参照)。

さて、ここに記載されている「明治35年に加藤に頼まれて久国を宗伯爵家に堀部と見に行った」というシチュエーションは一体なんなのか? 単純に加藤が名刀を見たいと思ったのならば、直接見に行くのであろうから買い取りの交渉が何かつたのではないだろうか。そしてそれは、重正没後のことではないだろうか。重正は鶯丸を入手して3年後の明治35年5月に没した。そして重正の蔵刀は息子の重望に相続されたと考えられる。重望は、絵画のほうに強い造詣があったことがうかがえるが、刀剣界隈で名前を見かける事は無いので、そこまでの愛刀家ではなかつた。

【伯爵田中青山】 [45]

『寶珠荘の座談』

膝うち寛げて伯の談話を聞かんものとして、此歳(昭和4年)七月二十三日伯を寶珠荘に訪問し《略》座談を試みた。

日露戦役後三十九年(原文ママ正・四十年)に下総の結城で大演習があつて結城が大本営になった。其の前年又僕が名刀を得た。それは備前の友成である。さき《に光頭献上》の大一字の助宗などよりずっと古いものぢや。それは大変な歴史がある。《略》結城合戦に関して《小笠原家で代々宝物にして居たが其の後それを売物に出した。それを伯爵の宗重望が持つて居たが、それを売出したときに僕が買ったのぢや。今言つたような次第で其の刀が結城に大変関係があるから、之を大本営に持つて行つて献上した。18

【東京日日新聞 明治42年8月21日】 [46]

『続刀剣談二十一』 羽卓

友成は古備前の名作なれど、他の刀に比して存して居る物が多い。別役君の話に友成中で優れた出来で然して正しい物は鶯丸友成で有ろうと言われた。此刀は越前勝山の城主小笠原家の先祖が足利家より戦功に依つて賜つた物で、その時の感状が付いている。生忠で太刀銘にて「備前国友成」と長銘に切つてある。維新後故あつて宗伯爵家に渡つて同家の重器であつたが、三年程前に田中光頭伯が買い取つて之を献上した。

羽卓の【刀剣談】は43年に再編され書籍として出版されており[47]、その時の表現は「二三年前」となっている。時期は書かれ

ていないが、大正時代の宮内省御剣係の小山田繁蔵[19]や、光頭と個人的に親しかった市島健吉[48]も光頭の前の所持者に関して「宗伯爵を経て田中光頭へ」と表現している。

光頭は風格の高い古備前を特に好んでいた。特に、「名刀とは將の將たるものの佩刀でなくてはならない。長く細身でいて鍛えの良いい名工の作でなければならぬ」という持論があり良く人に語っている。

【伯爵田中青山】 [45]

『趣味の人田中青山伯』 市島謙吉

伯の仰せられますに、一体此の刀剣と云ふものは、どうかと云ふと其の一番良いものは、何と云つても矢張り將の將たる人の差料でなければならぬ。即ち元帥的人と云ふものは騎馬の人である。馬に乗つて居る人の佩剣と云ふものは長くなければならぬ。長いと云ふと重くなる。重くなると取り扱いにくい。之を取り扱ひ易くすると云ふのには細身でなければならぬ。又割合に薄くならねばならぬ。細身であること云ふとどうにかすると折れやすい。折れないで細身で、軽くと云ふことになることと云ふ鍛えがよくなければならぬ。そこで名工の作でなければ、將に將たる人の差料と云ふことはできない。《略》唯それだけではいかぬ。必ず元帥的の差料には品がよくなければいかぬ。すなわち焼きが非常にいと云ふこと、匂ひがよいとか、どこからどこまで上品でなくちゃならぬと云ふことが即ち刀剣の極致だと

これはまさに鶯丸の姿ではないか。光頭は彼の思うところの「名刀中の名刀」を献上したのであろう。

て氏朝戦死し春王安王は小笠原大膳大夫入道政康及長尾因幡守豊景の為に擒にせらる持氏の季子永寿王も亦擒にせられ春王安王は其五月に美濃の垂井にて斬られしも永寿王は未だ幼年なりしかば死を許され後古河公方成氏と称したりき又小笠原政康は將軍義教より褒賞として足利家重代鶯丸の太刀に感状を添えて與えらる其の感状に曰く

今度結城館事 即時政落 凶徒

等悉討捕 刺虜 春王丸・安王丸

畢武略無比 尤感恩 食侯

仍鶯丸友成一腰 遺之候也

五月二十六日 義教將軍花押

小笠原大膳大夫入道どのへ

備前国友成は一條天皇御宇永延の頃の刀工にして表に「君万歳」と打ち裏に「備前国友成」と銘打ちたるものなりと云う当時宮相は左の歌を添えて奉れる由なり結城の大本営に供奉しける時鶯丸の太刀に添えて奉れる 光頭上

美いくさはたたかふ毎に勝山の

城につたへし太刀たてまつる

大前にささぐるたちのつかのまも

われはわすれじ君がめぐみ

この新聞報道は結城大演習から20日に帰京した翌日に各社一斉に出されており、結城合戦のことや、感状の内容が正確に記さ

さて、光頭は生涯二振の太刀を明治天皇に献上している。一振目は明治28年に宮内省の高官だった時、日清戦争により広島大本営で長らく指揮をとっていた明治天皇のストレス解消にと一文助宗太刀を献上している[45][49]。これは明治天皇の晩年(41年)にサーベル拵がしつらえられ、軍刀として佩刀されていた。現在には東京国立博物館蔵で、昨年熱田神宮で軍刀拵えと共に展示されていた[50]。二振目が明治40年(1905)に献上した鶯丸である。上述の通り鶯丸に対し、「又僕が名刀を得た」と光頭は語っている。鶯丸は、明治40年の陸軍大演習が鶯丸が小笠原に来た切欠となる結城合戦の地である結城で行われることや、この大演習は日露戦争(37、8年)の祝勝の意を表したことから、結城に縁があり、また勝ちと鶯丸が伝わった勝山を掛けた歌を添えて明治天皇に献上された[48]。

光頭が鶯丸を献上したことは、大演習が終了し帰京翌日に在京の新聞各紙で一斉に報じられている。

【読売新聞】明治40年11月21日 [51]

『宮相より献上の名刀』

— 結城大本営に於て —
宮内大臣田中光頭氏は大演習行幸供奉として結城に滞在中同地に因み深き足利家重代の鶯丸といへる名刀を畏き刃に奉りたりと云ふが其名刀の由来を聞くに後花園天皇御宇永享十一年二月足利持氏自殺の後持氏の遺臣は持氏の二子春王安王を奉じて二荒山に潜伏持氏の遺業を恢復せんと下総結城の結城氏朝に依り兵を率ぐ翌嘉吉元年足利將軍義教は諸軍を發して結城を攻めしも四月城陥り

れていることから何か光頭側からの発表があつたのであろう。読売、東京朝日、東京日日がこれに関する記事を独立に出しているが、その文面の内容は非常に似通っている。ここでは読売のみを挙げるが、筆者別稿『うくひす新聞』[52]に3社原稿を全掲載しているの参照のこと。ここで友成の鶯丸は「君万歳」と銘すると読めなくもないことが書かれているが、実際には鶯丸に「君万歳」とは銘されていない。このことは、8・6で議論する。

献上の日付について

結論を言えば、献上の日付は判明していない。

明治天皇の結城特別大演習への行幸は11月4日上野を出発し、11月20日に帰京となっている。様々な文献を当たってみてはいるが、献上した日付というのは載っていない。佐藤幸彦による「明治の刀界」という論文[53]に11月4日と書いてあるが、この論文は大正に発表された「明治刀剣年表稿」[54]の年月日を元にした論文で、元資料の自身を確認してみると行幸の日程を「十一月十四日御発駕二十日御還幸」と記述しているのみで、「明治の刀界」では頭の日程を書いただけであった。

光頭自身「結城に持つて行つた」とインタビューで語っていることと、21日に一斉に新聞報道されていることから14日から20日の間であることは確かであろう。光頭は宮内大臣であるので、行幸に供奉しており明治天皇と同じ電車で往復している。14日結城の行在所に到着後に、宮内大臣ら供奉の高官らに謁を賜ったことが新聞に書かれている[55]。このような記述は他の日には見られないことから、明確な献上の瞬間があるとしたらこの「宮内

大臣が謁を賜った14日」なのではないだろうか？ 結城大演習では15日に式典があり、茨城県内から刀剣を含めた様々な品が献上されており式次第や献上の品リストは詳細に記録に残されている[56]。この式典は茨城県により主催されており、この式典内で宮内大臣である光頭からの献上は考えにくい。特に、結城に縁がある鷲丸ではあるが、結城にとっては結城合戦に負けたことの証なのであり結城市民の前で大々的に献上するのはちよっと場違いなのではないか？ また、式典で茨城県側から献上される刀剣が名工友成傑作の鷲丸と並べられるのもちよっとかわいそうである。19日には宮内省主催の宴会が下館で開かれており、これは宮内省主催であった。15日や19日のような公の場での献上であったならば、同行の記者も承知しているはずでそのことが書かれていないので、献上は記者の列席するような公の場ではなかったであろう。

献上にあたって

鷲丸は高田庄左衛門という研師により研がれ献上されている。献上に際し、「浄める」意味で研ぎが入り白鞘が新調されていたことは時代は少し下るが、昭和3年の新聞記事に宮様に刀剣を献上する際には研ぎを入れ、白鞘をあらたに拵えるといった内容の記事が出ていることから推測できる。

高貴の宮様に差あげる場合は、浄めたものとして白鞘造りにし作りはそれに付随するものとして献上するのが古来のしきたりなので清めの研から、白鞘造りにと刀工は製作に余念がない(秩父宮

5 畏き辺りへ

明治天皇に献上

鷲丸は田中光頭より明治40年11月の結城における陸軍特別大演習に於いて献上された。明治天皇は愛刀家としても知られており、実に多くの名剣名刀が献上されている。その中でもお気に入りの刀を座右に置いており鷲丸もその中の一刃であった[60]。

大正天皇へ

明治45年8月に明治天皇が崩御され、大正天皇が即位した。それに伴い、鷲丸も大正天皇が受け継いでいる。このことにより、鷲丸にとって小笠原最後の主長育が仕えた主に受け継がれたことになる。

昭和・平成・令和へ

鷲丸は現在まで御物として宮中に伝えられおり、足利將軍から小笠原家に下賜されて600年以上経つが、その時の感状も現在まで鷲丸に添えられて伝えられている[1]。

6 鷲丸の引越し事情：明治編

小笠原家は廃藩置県後しばらくは旧江戸藩邸のあった日本橋区浜町(後の久松町)に住んでいたが、確認できているだけでもそれ以降四回は引越している。図2に引越履歴をのせる。転居時期が明らかなもの以外は文献から確認できる最も早い時期と遅い時期を掲載している。

に三条吉家が献上された時の記事[57]

鷲丸クラスタには有名な話であるが、「献上前刀身にはフクレがあり、フクレ直しの名人高田庄左衛門により修復されて献上された」[58]という話が残っている。現在ネット上では、鷲丸が「フクレ」により価値を失っていたが名研師により復活し献上されたというシンデレラストーリーがまことしやかに語られているが「価値がなくなっていた」というのは誤りである。ここまで本稿を読んだ読者にはお分かりであろうが鷲丸は献上前も明治刀剣界の重鎮らに名工友成の傑作と高く評価され、強く求められた名刀であるという確かな実績がある。「フクレを修復するために研ぎに出した」というよりは「献上のための研ぎに出したときにフクレも修復された」の解釈が正しかろう。(詳細は8・1で議論する。)[21]

光頭は鷲丸が自身の元にあった時の鞘(白鞘のことか?)は献上していいことは記録に残っている。

【やまと新聞】大正3年12月5日(他山陽新聞12月8日)[59]

『先帝を偲び奉る 名刀鷲丸』池邊義象氏談

刀身のみを献じて鞘を献じなかったという訳は臣下の使用したものを献上するのは畏れ多いというので、鞘だけは献上しなかったのであるが其の鞘を明治四十五年四月に田中伯が私に『九重の空にうつれる鷲のやどりし梅のたちえとも見よ』という和歌を添えてくださったので私はその後その鞘を我家の家宝にして大切に保存して先帝の御祭日には床に祀り拝礼することになっている池邊義象は明治天皇紀の編集委員。九重は皇居の別称。また明治天皇崩御は45年7月のことである。

7 小笠原家の祭祀と「鷲太刀祭り」に関して

小笠原政康が結城合戦に信濃より出陣する前の三月十五日に松尾の八幡宮前にて戦勝を祈願したことを起源として三月十五日を小笠原家の祭祀の日と定め歴代綿々と伝えられてきた、ということが様々な小笠原家関連の史料に記述されている。

しかし、この三月十五日という日付は前後のアリバイ的でありえない。そもそも小笠原家内の史料においても永享十二年(1440)と嘉吉元年(1441)が混在している。嘉吉元年とする史料は幕末の天保3年作成の家譜で、それ以前の史料は永享十二年としている。まず、結城合戦は3月4日に常陸国木所城で春王丸・安王丸が拳兵し、同月21日に下総国結城に入る。それに対し、3月末から幕府が対応を始め4月19日より総大将が鎌倉より出立し諸侯を集めたのが始まりである。小笠原政康が信濃を出発した時期に関しては諸説あるが同年11月には結城にて軍議に参加している記録がある。そのため、どちらの年の3月15日も政康は結城合戦の戦勝祈願を信濃で行うことはできない。【松本市史】[71]においてもこの矛盾が指摘されており、永享8年の芦田氏の討伐(久国の太刀を下賜された戦)に際したものでないかと書かれている。

鷲丸クラスタはこの3月15日の祭祀を「鷲太刀祭り」と認識していると思われる。この「鷲太刀祭り」という呼称についてだが、勝山藩時代における史料では3月15日に小笠原家の祭祀を行っていた記録はあるが「鷲太刀祭り」と称してはいない。幕末の天保から安政の頃(1850-1860頃)に小笠原家の侍医西門蘭溪が小笠原家の史料を集めて書かれた【菱実記聞】における記述では

図2：鷲丸の引越し事情：明治編 [61] [62] [63] [64] [65] [66] [67] [68] OpenStreetMap を使用

鷲丸の旅路：明治編



場所	時期	備考
旧勝山藩主小笠原家(当主：M6-長守、M6-M28(長守) 鷲丸所持 嘉吉元年(1441)5月 ~ 明治22年以降 26年以前?	日本橋区久松町 (勝山藩江戸上屋敷)	公文書 棟梁棟-M6・10 *
本所御町	★M14.2 M17.6 *	榎森御別荘 (M14.M17) 勝山殿第一夜 榎森御別荘
牛込区牛込井天町	M20.2(傳入)-M22.6 *	
道徳館(牛込区土馬)	M21.1, M22.11	小笠原所帯を牛込殿の記録
牛込区北町	★M23.4-23.11 *	勝山殿M23.4.24 榎森御別荘
小笠原家より売却後しばらく行方わからず		
旧対馬藩主 宗家(当主：M35-重正、M35-重助) 鷲丸所持 明治32年 ~ 明治39年	下谷二長町 (対馬藩江戸上屋敷)	勝山殿M32.7.5, 信濃甲申青山 榎森御別荘
宮内大臣 田中光頭 鷲丸所持 明治39年	明治39年11月	信濃甲申青山
大正天皇 鷲丸所持 明治40年11月	明治39年11月	榎森御別荘
皇居		

☆一転、山崎不明 ★一生出陣不明
【文庫から復元された】の事(不明)にて山崎不明のみを記している。
【文庫から復元された】の事(不明)にて山崎不明のみを記している。
【文庫から復元された】の事(不明)にて山崎不明のみを記している。
【文庫から復元された】の事(不明)にて山崎不明のみを記している。
【文庫から復元された】の事(不明)にて山崎不明のみを記している。

8 鷲丸に関わる誤伝

本章では明治時代における鷲丸の誤伝を紹介する。一般的には「正しい来歴」と思われているものも本研究で資料を比較検討し「誤伝」としたものもある。そのため、なぜそう判断されたかを示すためかなり詳しく資料を載せている。

8・1 フクレにより価値がなくなっていた説

ここまで本稿を読んできた一部の読者は疑問に思っていることだろう。「鷲丸はふくれにより献上前に価値がなくなっていたのではないか?」と。鷲丸クラスタには有名なこの話は、資料に残されているのではなく「献上前フクレがあり修復された」という資料から連想されたものがネット上で広がったものである。フクレは瑕なのだから、キズモノになっていたのは事実ではないのか? と思うかもしれないが、古刀においてフクレというのは小さなものであれば切れ味に影響はないものなのでことさらに問題にするものではないと明治の頃の刀剣書に書かれている。(美人にちいさなニキビができたからといって、美人は美人だ。)ましてや鷲丸は古刀中の古刀である。時折ネット上に「フクレ」として、刀身の大きな空洞の写真があがっていることがあるが、鷲丸が研がれた明治時代の刀剣書を読んでいるとそのような大きな空洞はフクレとは呼ばなかったと思われる。献上前に研ぎを入れることも事態は特段珍しいものではないし、鷲丸は現代においても「健全」である(研ぎ減りが少なく作刀時に近い姿)との評価も受けている[1]。

古来より名刀の必須条件として「切れ味の良さ」が求められた。友成の作は鎌倉時代には切れ味が良い事から選ばれた注進物にも名を連ねている。鶯丸は美しいだけでなく切れる刀なのだ。

鶯丸のフクレに関するシンドレラストoriesはエモな設定としてネットや二次創作上で語られることも多いが、個人的には作刀されてから千年間―記録に残らなかった450年、小笠原での450年、てんてんとした20年、そして御物としてのこの100年間―鶯丸を健全であると賞されるほどに大切に守り伝えられた先人たちの功績にエモさと畏敬の念を感じずにはいられない。

注…本節は創作上の設定を批判するものではありませんが、「価値がなくなっていた」「小笠原家は貧乏だったから手入れてできずに朽ちてしまった」などという話が本場にあつたことのように流布しているのを見ると、小笠原家の魂の名譽のために、小笠原家は鶯丸を大切に伝えたことを！ もっと知ってくれ！ と叫びたくなるのです。鶯丸の伝わった小笠原家は家督争いや乱世信濃の情勢に翻弄され決して安穩な歴史ではありませんでしたが、それでも譜代大名として家を残し本場に鶯丸を大事にしました。

本節の詳細と参考文献は筆者別稿の『鶯丸という現象』資料から読み解く鶯丸の姿^[73]を参照されたし。

8・2 宗家において小鳥丸と同時期入手説

小鳥丸と鶯丸を宗重正が同時期に入手したという記述は『刀剣談』に記されている。

【刀剣談】 高瀬羽卓^[47]

目録の内容は遊就館からの発表を書いたものと思われ、このような筆者の風聞の類と比較して情報の確度は質的に異なる。

8・3 対州宗家伝来説

大正、昭和の刀剣の大家である本阿弥光遜の書籍^[75]では、鶯丸を「宗家伝来」と記載しているがこの表現は適切ではない。宗家が所持していたことは事実であるが、先述の通り宗家に入つたのは明治以降の宗重正から明治39年には田中光頭へ売却しているの重正から重望の一回だけの相続なので宗家伝来とは言えない。この光遜の「対州宗家伝来」表現から派生していると思われる、「鶯丸は江戸時代に小笠原家から宗家に入った」という解釈がネット上で散見されるが、これは明らかな誤りである。たとえ明治32年に宗重正が入手したという新聞記事を信用できないとしても、特に明治21、22年に小笠原長育により鶯丸が遊就館に出陳されているという事実がある。また、宗家伝来と記載するこの書籍では、宗家からの売却先を「山本達雄」と誤って記載し(後述)、元来の小笠原家のこともその当時(昭和7年出版)御物であることにも触れられていないので、「鶯丸」という個体をきちんと把握してない可能性が高い。

8・4 秋元子爵または山本達雄所持説

鶯丸の明治時代の宗家の次の所持者としてメジャーな説として秋元子爵または山本達雄が挙げられている。しかし、先述の通り鶯丸は宗家から直接田中光頭に売却されており、それを証言しているのも田中光頭本人である。ことから秋元、山本説は否定される。

『御物』

▲小鳥丸

奮闘時代に、此宝刀が伊勢貞丈の家に伝つてゐたと云ふ話が知れ、維新後に宗伯爵が足利家より小笠原へ賜た鶯丸(後に此刀の事は説く)と共に小鳥を買取て秘蔵したが、宗家は平知盛の子孫と云ふ事だから、平家の重代が同家に入つたのも面白い事である。然るに前代の伯爵は陛下が古刀御愛玩の盛慮を奉じ之を献上した

▲友成

越前勝山の小笠原家重代の鶯丸友成。この太刀は足利尊氏より小笠原家の祖先が賜つたもので、維新後いかなる謂れか宗伯爵の先代が小鳥丸と共に手に入れて持て居られたが、小鳥丸は献上して御物となり、この鶯丸のみ二三年前まで宗家にあつたのを田中伯(光頭)が買い取り献上した。

羽卓は宗家から田中光頭に売却された事に関しては数年前のことなので正確に記述しているが、なぜか宗家に入つたかどりは間違っている。ただか100年位前のことなのだが、高瀬羽卓は明治33年の「刀剣念」発足当時から出入りしているが、鶯丸の評価は別役成義からの伝聞を載せているので宗重正とは鶯丸を見せてもらえらるほど懇意ではなかったのかもしれない。(別役は明治38年に没しているの、鶯丸を見たのは小笠原家時代か宗家時代。)

宗重正が小鳥丸と鶯丸を同時期に入手したということは小鳥丸献上の明治15年より前だという事を意味しており、明治21、22年に小笠原家から遊就館の一般公開に出陳されていることは確実なのでこの説は完全に否定できる。(新聞に記載された出陳

はそんなに高い値ではなかったのです。

次に、本阿弥光遜の弟子による著書である。

【日本刀を研ぐ】 永山光幹^[74]

『明治・大正の刀剣社会と光遜先生のこと』

日清戦争が終わって、二、三年後、つまり光遜先生が琳雅先生に入門したころは世間も不景気のどん底で、刀剣社会はそれに輪をかけてひどいものでした。(略) 刀剣商も刀匠も研師も、白銀師・鞘師も皆想像を絶する貧乏ぶりでした。ちょうどそのころ(明治三十二年六月)、1500円で刀を買われた方がおり、刀で生活する人々はこれ聞いて例外なく仰天しました。現在国宝の吉岡一文字助光の長銘の太刀で、明治二十七年に麴町の質屋「越又」に入つたのですが、愛刀家の垂涎的であつたにもかかわらずいかにも高額であり、そのうちどんどん金利がついて1500円になつてしまつたのでした。買われたのは、第九銀行の頭取をしていた堀部直臣さんです。(略) これが刺激になつて、対馬宗家の鶯丸友成が秋元子爵へ、一文字吉房が三井財閥の大番頭益田孝さんへいずれも1500円で納まりました。

どちらも情報の発信源は光遜であるはずなのに、鶯丸の買手手が山本達雄↓秋元子爵と変化している。また、不景気のどん底と書いてあるが、日清戦争後2、3年は戦争による好景気の真っ最中であつた。明治30年頃から不景気が始まる。(後述)ここに出てくる人物で秋元子爵以外は、実業家山本(日銀総裁)、堀部(第九銀行頭取)、益田(旧三井物産社長)と好景気下において、パブリーを享受できる人物である。

任訴訟を起こされ明治36年に堀部は有罪判決を受けている。購入時期について

この「一文字助光を堀部直臣が購入した時期」を考察するが文献によつて明治26、7年頃から明治32年まで大きく幅がある。表3に日清戦争から日露戦争と関連する出来事の年表をあげる。

表3: 日清・日露戦争前後の年表

明治年	月日	出来事
27	7/25	日清戦争勃発
28	4/17	日清戦争終結(日清講和条約)
30	夏前	戦後しばらく好景気(大戦景気)
32	7/5	戦後の第一次恐慌おこる
32	夏頃	2年下期まで
33	3月	宗重正鶯丸入手の新聞記事掲載
33	3月	少し景気が回復
33	3月	第二次恐慌おこる
33	3月	3年上期まで
33	12/24	第九銀行支払ひ停止
35	1	堀部裁判中に会を開き助光をみせる
36	5月	堀部直臣有罪判決
37	2/8	日露戦争勃発
38	9/5	日露戦争終結

表に示す通り、日清戦争後しばらくは戦後の好景気が続くが30年から反動不況により第一次恐慌に陥る。32年頃、景気が少し回復するも33年春には第二次の恐慌がおこる。そして、33

何かと参照される『日本刀大百科事典』の鶯丸ではこの事項に關しては参考文献が指定されていないが、ここでも宗家からの売却先は秋元子爵とされている。

【日本刀大百科辞典】福永醉剣^[76]

『鶯丸』

明治維新後、同家を出、宗伯爵家に入ったが、秋元子爵が一五〇〇円で譲り受けた。

これは『日本刀を研ぐ』より前に出版されているため、「鶯丸は秋元子爵が購入」という話は界限で広く信じられていたのだろう。

堀部直臣の「一文字助光について」

まず、堀部直臣が一文字助光を購入した時期を探る。この一文字助光は阿部豊後守忠秋が「隅田川乗切」により、当時の將軍家光より下賜されたものであり現在国宝となつた名刀である。個人蔵^[77]。この「隅田川乗切」は寛永7年洪水の隅田川を馬で乗切つて被害状況を伝えたことによるもので、講談や絵本にもなっている。ちなみに両国の刀剣博物館(明石国行のいるところ)隣の旧安田庭園の奥に駒止稲荷が鎮座しているが、これは「隅田川乗切」のときにこの地に阿部忠秋が馬を留めたことに由来している。

堀部直臣の堀部家は江戸時代は熊本藩の細川家に仕え、三千石の身であった。その祖は忠臣蔵で有名な堀部弥兵衛・安兵衛の堀部家である。明治の中頃、直臣は熊本第九国立銀行その後継の第九銀行(明治30年)の頭取であつたが、日清戦争後の景気が終息した後の不況下、東京で調達した資金を大坂の株取引に投入し失敗、第九銀行は明治33年の年末に支払い停止となり、背

年年末に堀部が頭取をしていた第九銀行の支払い停止となる。堀部は背任訴訟を起こされ明治36年に有罪判決が確定している。大恐慌の時期の定義に関しては、資料によつて多少異なるが第二次恐慌内において第九銀行の破綻は大きく取り上げられている。光遜の著書では「その当時」が日清なのか日露戦争なのかは不明確である。一方『日本刀を研ぐ』では明治32年6月と断定している。この「堀部直臣が一文字助光を千五百円で購入した」事象は有名だったよう、様々な書籍に記録が残っている。

【名士と刀剣】小倉惣右衛門^[43]

『堀部直臣』

私(小倉惣右衛門)がお目に懸りましたのは明治26、7年の頃で西垣翁と同道して河合正宗を見に御出になりましたのが初対面でありました。例の有名なる吉岡一文字助光の名刀を越又より買われましたのも其頃でありまして、一刀に一千五百金を投じたのです。こぶる有名になりました。

【刀の手引き】 川口陟^[78]

五、公売の記録

斯くして高値を以て誇つていた刀剣も、明治の磨刀令が出てからたちまち奈落の底へ落ちてしまいました。明治十年頃より二十五年頃までは神田の柳原土手で名刀鈍刀一束三十銭から五十銭位という相場になりました。その頃の刀剣商の取引に一日三十円の売り上げがあれば成績のよい方だったそうです。明治三十年頃になつても福岡一文字の素晴らしい傑作刀が百円でなかなか売れませんが阿部豊後守が隅田川乗切に賞として、將軍家から拝領した備前吉

岡一文字助光の生中心穴一個二尺七寸という名刀が百五十円、それを千五百円で買った人があった時、あれは馬鹿だとさえ笑われました。然し、笑われた人が大正九年に売った時は二万七千円になりました。

【刀剣人物誌】 辻本直男 [79]

『堀部直臣』
明治二十六、七年頃のことであるが、吉岡一文字助光の名刀（国宝・阿部忠秋が隅田川の奔流を馬で乗りきって、將軍家光から賞賜されてという曰く付きのもの）を、千五百金を投じて買い入れた時には未だ好況時代の銀行の頭取であったし、さすがに大物との大評判をとった。

表4. 一文字助光を堀部直臣が購入したとされる時期

時期	コメント	文献
明治26、7年頃	小倉惣右衛門	[43]
日清日露役の頃	本阿弥光遜	[75]
明治32年6月	永山光研（光遜からの伝聞）	[74]
明治32年6月	27年頃質屋に入り	
明治26、7年	日清役後不景気どん底の頃	[79]
明治26、7年	辻本直男	
明治26、7年	（堀部が）未だ好況	
明治30年頃	時代の銀行の頭取	[78]
明治30年頃	川口陟	

これらの資料の著者で、実際に堀部が助光を購入した時期に現

を研ぐ」に書かれた「堀部の助光が刺激となって一文字吉房が益田へ1500円で納まった」という記述は正確とは言えないが全くの誤りというわけではない。

益田が購入したくぐり、益田に岡田切を斡旋した小倉惣右衛門が書き残している。

【刀剣会誌39号 続名士と刀剣】 小倉惣右衛門 [81]

『益田孝』

明治35年の秋、故堀部先生が、一夕岸つ御宅に小剣会を御催になりました。《中略 惣右衛門の他》益田先生が、故人朝吹先生とお連れ立ちになってご出席なされました以外には《暴風雨のため》誰も御出になりませんでした。会は何しろ助光の名刀が出品となり、また話し上手の堀部先生がおりたので愈々面白くなり、近日復た第二会を堀部邸に開催するお約束が席上に成り立ちました。すると二三日の後、益田先生より御迎ひが参りましたのでまかり出ますと、益田先生は、第二会の剣会には堀部氏の鼻明かしとも云うべき名刀を出品して驚かしたがい、何かないだろうかとこの事でありましたので、以前神山男爵より取り出して、福住氏にお願ひしてありました福岡一文字吉房の名刀のお話を致し、之れを取り出してお願ひしましたが、其代金は一千三百円でありました。《略 今村押形の掲載内容について》それで益田先生は、之を携帯して第二剣会に出かけられ、主人を初め一座をあとと驚かし、天晴一流の刀剣家となりすまして満悦されたのであります。この剣会は堀部が裁判中に開催されたものであると惣右衛門は記

役世代だったのは小倉惣右衛門と本阿弥光遜のみである。

「未だ好況時代の銀行の頭取」という表現に対しては、日清戦争開始による大戦景気が起こってからの第一次恐慌の30年夏までという範囲と考えるのが妥当であろう。しかし、『日本刀を研ぐ』の32年6月は30年恐慌の不況が回復の頃ではあるが好景気とは言えない。むしろ宗重正が驚丸を手に入れた時期と合致する。

どの資料からも決定的な時期を考察することはできないが、堀部が一文字助光を購入したのは、さすがに第九銀行破綻の33年末よりは前であろう。（30年の第一次恐慌の前なのではないかと個人的には感じている。）検索の利く、朝日新聞と読売新聞のアーカイブでこの助光購入の記事がないか探してみたが見つからなかった。むしろ、宗重正が驚丸を入手したことが二紙で記事になるほうが異例なことである。

益田の一文字吉房・岡田切

つぎに益田孝が購入したとされる一文字吉房に関して考察する。益田孝は旧三井物産の初代社長（明治9〜）で、三井財閥発展の基礎を築いた人物であり茶人、美術収集家としても名高い[80]。益田が所持していた吉房の名刀と言え、太刀・銘吉房・号岡田切（現国宝・東京国立博物館蔵）である。この岡田切は、大正天皇が東宮時代に益田より献上されたものである。

この岡田切は確かに、堀部の一文字助光をきっかけとなり益田が購入している。ざっくり言うと明治35年に堀部に助光を見せびらかされた益田が、堀部をあとと言わせるために用意したのがこの岡田切であり、購入価格は千三百円である。なので、『日本刀

述しているのが[43]これが明治35年であったことは正確であろう。岡田切はその後明治43年6月に東宮時代の大正天皇が小田原の益田邸に隣接する山県有朋邸に行啓されたとき益田が余興に謡曲の一節を披露した縁故で献上された[81]。

明治35年の堀部の剣会

前述の通り、堀部は明治35年秋に益田らを招いた剣会を開いている。このことが切欠で、一時期剣界が大いにもりあがったことを小倉惣右衛門が記録している。

【名士と刀剣】 小倉惣右衛門 [43]

明治35年堀部先生裁判の真最中、根岸の寓居に益田男爵を始め團男爵、故浅田正文氏、故加藤正義氏、故朝吹英二氏を招待して刀剣会を催し大いに刀剣を鼓舞されたことがありまして、之が原動力となつて一時、大いに発展いたしました。

さて、この節の本題である「堀部の一文字助光1500円で購入がきっかけとなり、一文字吉房や驚丸が1500円で売却された」という説はこらへんの話が色々ごっちゃになったのではないだろうか？（事実、吉房は堀部の助光が切欠となっている。）

山本達雄の備前国友成造

光遜は驚丸と山本の友成（備前国友成造）を混同していたのではないだろうか？

山本達雄は明治31年10月から明治36年10月まで日銀総裁を務め、総裁辞任後は、貴族院議員、大蔵大臣、農商務大臣等を歴任した人物である[82]。

達雄の所持していた友成は現在東京国立博物館蔵で現国宝の「太

刀銘備前国友成造」[2]で、明治34年までは、山本以前の所有者の元にあつたことと明治42年には、すでに山本が入手していることが後述の資料により分かっている。

この友成の来歴に関しては、昭和の刀剣書において大抵は山本家の友成とだけ書かれそれ以前を記しているのは見ることがないが詳細を調査したので記しておく。昭和5年の名宝展開催中の読売新聞紙上に「備前国友成造の太刀は、宝永七年に老中井上河内守（正岑）が將軍から拝領し、井上家に伝わったものを明治になって旧藩士のA塩氏（一般人なので伏字とする）に日清出征の引き出物として贈り、軍刀として戦地向かった」とある。実際にこんな名刀を軍刀として出征したのは定かでないが、この氏は近衛師団として日清戦争に出征しているのは確認できた。

【読売新聞昭和5年4月24日】 [83]

『備前友成の太刀』

今を去る約九百四十年永延年間、備前鍛冶の素地を築いた友成改心の作、友成作の刀は相当現存しているが、この一口の如き見事な健体を持しているものは無類である。長さ二尺六寸一分、鑄作り表裏榭樋角留の内、帯表腰元に素剣の浮彫があり刃は小乱れ小■《足へんに花》付で生忠の六字銘「備前国友成造」は刀剣家の間で特に推賞されているこの太刀は宝永七年、老中井上河内守が將軍より拝領し家宝としていたが、明治時代になって、井上家の旧藩士で当時近衛師団付の將校であったA塩氏が井上家から日清役出征の引出物として貰ったもの、氏はこれを軍刀として戦地向ったというが時の出征將校中、これ以上の銘刀を持参した將

このA塩氏は明治29年時点で陸軍の士官（中尉）近衛師団として日清戦争に出征しており[87]、またこのA塩氏と同一人物と思われる者（フルネームと従七位が一致）がこの刀剣会例会の翌年の明治35年に、催眠療法をうたうかなり怪しげな開業をしているので[88]そのための資金調達としての売り払い先を探しての出品だろうか？ また、山本達雄は明治33年時点で刀剣界との繋がりがあつた（会誌に寄稿している）ので、例会での友成を見たか、噂を聞いたのだろうか？ この友成は、明治42年には山本が所持していた[89]。

山本達雄の伝記[90]にも、この友成の話題が出てきている。

《山本の骨董蒐集集に関して》殊更に刀剣の中には古備前の友成があり、国宝に指定されていた。友成は毛利侯爵家にも一口所蔵されていたが、それには銘が備前国とあるだけで、刀工銘が消えている。完全な友成は明治天皇御愛用の軍刀に仕込まれたものと、この山本家くらのものである。

完全な友成とはおそらく驚丸のことであろう。（軍刀に仕込まれたというのは、光頭への献上した助宗と混同しているのだろうか？）驚丸が山本の元になつたのであれば、山本サイドからこのような表現は出てこないで、山本所持説を否定する傍証になる。

秋元子爵について

宗家の次の所持者を秋元子爵とする説はわりかしメジャーである。これは、『日本刀大百科事典』の「驚丸」の項にそのように書かれていて、様々なところで引用されているためである。

明治30年頃の秋元家の当主は、興朝である。秋元家は館林藩

校はなかつたろうと、未だに残る話題である。現在は山本達雄男爵家の秘蔵である。「日本號槍「ヘシキリ長谷部刀」なき会場にこれに代つて異彩を放つものである。

井上家における拝領の下りを記した史料を挙げておく。【寛政重修諸家譜卷第二百四十二】清和源氏 頼季流 井上正岑の項

宝永七年九月十四日清揚院殿（徳川綱重）三十三回の法会行わるるとき其事を奉行せしにより、備前友成の御刀をたまふ。

綱重は第三代將軍家光を実父に持ち、兄家綱（四代）、弟綱吉（五代）は將軍になつている。綱吉には子がなく綱重の子が養子となつたのが六代將軍家宣である。家宣は宝永六年に將軍就任し、翌年家宣の実父である綱重の法要を行っていることになる。

明治34年9月の刀剣会の例会に友成はこのA塩氏より出品。

【刀剣会誌 第十三号】 明治34年10月発行

『会報』

九月十五日例に依て本会鑑定会を靖国神社境内遊就館楼上に開けり当日の出品目録は乃ち左の如し

備前国友成造六字銘太刀

乱刀表裏樋角留内二剣ノ彫アリ長二尺六寸五分半

但宝永三年極月三日代五百貫折紙附

A塩 君出品

5 日本号と長谷部は期間限定展示。当初、初日5時間のみ展示だったものを熱い要望で5日間に延長[84]。

主時代に明治維新を迎え、鳴狐を所有していた家である。興朝は、発起人に名前を連ねてはいないが明治40年頃には「刀剣会」のメンバーであつたことが、当時の例会出席者の名簿からわかる。何故、秋元子爵が驚丸の所持者として出てきたのか？これがさっぱりわからない。先述の山本達雄のように、友成の名刀を所持していたという事実は今のところどこにもうかがえない。明治30年頃、助光が高額で売られた頃に秋元子爵もなにか名刀を高額で購入したのだろうか？ 4・3でも触れているように、明治32年の宗重正が驚丸を入手した直後あたりに、秋元や重正が宗重正邸での刀剣の会開催を始めたこと何か誤認があるのだろうか？

8・5 小笠原家から明治天皇に献上説

小笠原家から直接明治天皇に献上されたと記載する資料も存在する。これは刀剣書ではなく、長野の郷土史家による論文にある。筆者は、大正8年8月に長育の長男勤一に面談し小笠原文書を閲覧・撮影している。さらに、昭和10年1月に大正8年に没した勤一の跡を継いで小笠原家当主となつた牧四郎に面会し、再び小笠原文書を閲覧・撮影している。

【信濃 第2次 (54)】 [91]

『勝山小笠原文書について 上』 市村威人

《驚丸の義教からの感状に対し》これは永享十三年（嘉吉元年）政康が信濃の諸族を統督して下野の結城城を攻めてこれを陥れ、足利持氏の遺孤春王安王を虜にした賞として、將軍義教より驚丸の太

刀を下された時の感状である。この鶯の太刀は小笠原家の重宝として通代綿々相伝え、信州松尾の神宮寺では年々三月十五日に鶯の太刀祭というを行い、越前勝山神明宮の祭日も同じく三月十五日であった。ところが長育時代に勝山家が財政難に陥ったので、この太刀を外に出すことになったのを時の宮内大臣田中光頭伯の斡旋により感状を副えてこれを宮内省に献上することになり御物となった。それは明治35年のことである。

明治天皇に献上されたのは明治40年であるし、長育は明治28年に没しているため長育時代の明治35年に外に出すことになったという記述も正しくないことがわかる。しかし同様な誤伝は勝山側の郷土資料にも見られる。

勝山藩古事記では鶯丸に関して以下の様に記述している。
【勝山藩古事記】

『宝刀鶯丸の由来』
是れ即ち鶯丸の太刀は小笠原家の家宝として累代伝来せしが長育公の時明治天皇の御手に入り今は国宝として宮中の御物として保存せらる。

しかし、巻末においてこの鶯丸に関して取り調べを進めて宮内省に問い合わせたところ、宗伯爵を経て、田中伯爵より献上されたと記述されている。

これらは郷土史料研究の資料であり、鶯丸の処遇に関して単なる信憑性の低い風聞を載せているわけではなく小笠原家に聞き取

6 原文では大正天皇となっているが巻末で誤植とあり。

りを行ったであろうことは想像される。その上で同じように誤った情報が伝えられているということは、長育亡きあとの小笠原家内において、鶯丸を手放した経緯は正確には伝えられていなかったのではないだろうか。長育が亡くなった時、勤一は9才、牧四郎は2才かそこらであった。その後彼らは親戚の家で育てられており、長育時代のことを知る家令などはいなかったのではないかと

8・6 銘「君万歳」説
古備前の刀工「友成」は、複数人、少なくとも2人いることは現代の刀剣書に於いて指摘されていて、「君万歳」と銘された友成の太刀もある。

鶯丸に「君万歳」銘があると記載している資料がいくつか存在している。特に、明治40年の献上の翌月に出た【弘道】の記事33には、「君万歳」と銘すると明確に書かれている。

【弘道 189号】^[92]
『名剣鶯丸』

《略 光頭献上と結城合戦に関して》因みに備前国友成は一条帝の御宇永延の頃の刀工なるが鶯丸には、表に君万歳と打ち裏に備前国友成と銘あるとぞ承る。

この資料は、国会図書館デジタルアーカイブで「鶯丸」と検索かけたときにヒットする4つの資料のうちのひとつなので、鶯丸研究において読まれる機会も多いだろう。この【弘道】という雑

7 【勝山藩古事記】^[19]、【弘道 189号】^[92]、【刀剣と歴史 423号】^[93]、【国宝日本刀特別展目録】^[94]

るものはすべからず裏表の写真が載っており、解説にも両方の銘が書かれている。小龍景光の場合解説に
太刀 銘 備前国長船住景光
元享二年五月日

と、裏表の両銘が記載されている。他の図録でも裏の写真がない場合でも、裏銘があれば必ず表記されており、銘があるのに書かれていないというのではやはり考えられない。

では次に、「君万歳」と銘されていると誤認されるに至った経路を考察する。明治以降、鶯丸は一般公開されたり、小笠原を離れて愛刀家の間をてんとしている間に幾度か講話や新聞紙上において話題に上っているが、そのどれもに「君万歳」と銘されていることは書かれていない。

「君万歳」が初めて出てきたのは明治40年1月の結城陸軍大演習の行在所（大本営）において田中光頭が明治天皇に献上した時の新聞記事であろう。4・4で触れたように、11月21日に一斉に三紙（読売新聞、東京日日新聞、東京朝日新聞）が鶯丸献上の記事を載せている。また地方新聞は、一日遅れで系列の新聞と同じ内容を掲載している。これら三紙の記事は、独立な取材をしたものとは思えない似通った構成・内容になっている。友成の説明をした箇所を抜粋する。

【読売新聞】
『宮相より献上の名刀』
——結城大本営に於て——
備前国友成は一條天皇御宇永延の頃の刀工にして表に「君万歳」

と打ち裏に「備前国友成」と銘打ちたるものなりと云ふ

【東京日日新聞】
『献上の太刀』

▲足利家重宝鶯丸
鶯丸と名付けられしものにて一條帝の永延年中に備前国友成の手に作り表に「君万歳」との刻ある名刀なりしとぞ

【東京朝日新聞】
『名刀「鶯丸」の献上』

▽結城大本営に於て
▽田中宮相より奉獻
備前国友成は一條天皇御宇永延の頃の刀工にして表に君万歳と打ち裏に備前国友成と打ちたり

重正が入手した新聞記事（4・3参照）で友成の説明を「能登守教経の佩刀を鍛えたる備前友成」としていることから、当時の教養としてある程度は能登守教経佩刀は友成である認識があったのかもしれない。もしくは、プレスリリース原稿で友成の例として出した能登守佩刀の友成は君万歳という「部分集合」的な情報が友成はすべからず君万歳と銘すると勝手に解釈され聖上に献上したる太刀の銘としてのキャッチーさも相まっての友成君万歳になったのではなからうか。事実、記事によって「友成は君万歳と銘する」と「鶯丸には君万歳と銘されている」の二つの表現がある。これらの記事が大々的に世に出た事により、宮内大臣田中光頭の献上した友成は『君万歳』と銘打たれていると広まったのであろう。

た。」と語っている。このように自身が献上した助宗が御佩刀として愛用されたことを名譽なことと語っている一方で、鶯丸に関する話題では軍刀となったようなことは一言も触れていない。この光頭の献上した助宗は鶯丸献上の翌年の明治41年にサーベル拵となったことから^[50]、この太刀とごっちゃになっている可能性が高い。

または、刀剣の趣味を解さない一般人にとって「刀剣が好き」だとか「座右に置かれる」と言われたら、普段から使っている、当時であればつまり「軍刀である」という連想ゲームになったのではないだろうか？「包丁を集めている」や「お気に入りの包丁」と言われた時に、料理に使っていると誰もが解釈するだろう。

他にもこのような「明治天皇の軍刀」と誤認されていると思われる太刀がある。特に小竜景光は「明治天皇のサーベル拵付軍刀」として強く認識が広まっているものの、それは誤伝であると福永酔剣は断じている^[96]。確かに、軍刀であったならば軍刀であると書かれるべき太平洋戦争直前の遊就館の展示に於いてそうとは書かれていない^[97]。

9 鶯丸異説

9・1 祟る？ 説

明治45年3月の東京朝日新聞に、「日本刀の衰亡」というコラム記事が三日連続で掲載されていた。このコラムでは主に廃刀令以降衰退する刀剣界を憂う内容が綴られている。その中で、刀剣と迷信という節に、祟りがあるという噂のある刀に村正とともに

8・7 明治天皇の軍刀説

「鶯丸が軍刀として明治天皇に佩刀された」としている文献がいくつか存在する。

まず、明治天皇紀の編集員である池邊義象の談として新聞に以下のようなコラムが載っている。

【やまと新聞】大正3年12月5日（他山陽新聞12月8日）^[59]
『先帝を偲ぶ奉る 名刀鶯丸』——池邊義象氏談——

《鶯丸と結城合戦、献上の説明》ところが此太刀が御慮適て直ちに御軍刀として絶えず御佩刀あらせられたということである。また、先述の山本達雄の伝記^[90]にも
完全な友成は明治天皇御愛用の軍刀に仕込まれたものと、この山本家くらのものである。と書かれている。

これもまた無いことの証明になるのだが、明治天皇の愛刀を紹介している刀剣系の書籍に、座右の名刀として鶯丸の紹介はあれど、軍刀であったとはどこにも書かれていない。

また、田中光頭本人のインタビュー^[45]において「日清戦争の折に、宮内省の高官として広島の本営に赴く際に明治天皇の御慰めとして一文字助宗の太刀と、岩崎彌之助に頼まれた古備前の助平を持って行き献上した。明治天皇は助平を軍刀として持て佩刀なさっていたが、晩年には軽い助宗を軍刀として佩刀なさった

8 明治27年と28年の日清戦争では、明治天皇が広島大本営において2日間戦争指揮を執っていた。

なんと鶯丸が挙げられている。あまりにも唐突なご指名であり、他の刀剣、例えば鬼丸国綱あたりと間違えていないか？とも思うのだが、ひとつの記録として残しておく。

まずこの連載に関してだが、署名はないものの、刀剣のド素人が書いた記事ではなさそうである。

【東京朝日新聞】明治45年3月20日
『日本刀衰亡』——刀剣と迷信——

斯くの如き機運に向ふと共に一方其筋でも古名刀の散逸を防ぐ為古社奉納の刀剣を検査して現に二百五十本許りを国宝に指定してあるが驚くべきは昨年巡回の際の如き古い記録に依つて其刀剣を調べてみると大半は外観だけを存して中味は似ても付かぬ贋物と擦り換へられて居ると云ふ有様であつたと云ふ、此際若狭國小濱に若狭彦神社と云ふがあつて、宗近の古刀が奉納してあつて眞物と確定し国宝の中に編入されたが是は領主酒井家の家老酒井内匠介の奉納したもので世に珍らしい名刀であるが此刀を家に置くと祟りがあると云ふので奉納したものだ云ふ、斯う云ふ風の迷信は随分沢山ある事で、彼の徳川家に於ける村正、友成の鶯丸等は人口に膾炙して居ることで宗近の古刀もその一種らしい

この記事が出ている時点で鶯丸は御物なのであるが一体どういう見でこれを書いたのか？ 明治末において、鶯丸がこのような噂を立てられていたという資料は他には見つからない。鶯丸

9 人口に膾炙し膾炙（なます）と炙（あぶり）とが、だれの口にもうまく感じられるところから人々の話題に上つてははやされ、広く知れ渡る（デジタル大辞林より）

丸を献上して2年後に田中光頭が失脚したことからへんが関係しているのだろうか？ この光頭の失脚と前後して、後妻との再婚を新聞ではゴシップ的にうるさく書き立てられている。宮内大臣を辞任したのはこの醜聞が関係しているのだ、収賄だの言われている。

鶯丸の歴史をたどると、家を守る幸運の宝刀とは言い難いところもあるしこの噂自体を何かの書き間違いと両断することも出来ないのである。鶯丸が祟る刀かと言われれば否であるが「こういう噂があった」こと自体は今のところ否定できないので、誤伝ではなく異説という章にまとめた。

10 やつぱり

本稿では明治時代を中心とした鶯丸に関する資料を包括的に示した。鶯丸は歴史的にメジャーな所持者や、派手な逸話を持つ刀ではないにもかかわらず明治刀剣界の中心的な役割を担っていたメンバーが所持者であったことから当時の新聞にその来歴を伺うことができたのは非常に珍しいことである。しかしながら、そこまで詳細に記録が存在しながらも現代においては誤伝である可能性の高いものばかりが残りを残されている。誤った歴史は、本来の歴史に関わった人々の想いや功績を否むことにも繋がる。

千年の歴史を持つ鶯丸としての明治の45年は一瞬の出来事かもしれないが、この我々の現代へと続くターニングポイントでもあった。この鶯丸の大切な歴史を護りたいと思いいここにまとめた。

参考文献

- 御物皇室の至宝、宮内庁協力、毎日新聞社、1991。
- 。国宝、国宝、太刀、銘備前国友成造
- 文化遺産データベース太刀、銘友成作
- 広島県の文化財「太刀」太刀、銘友成作
- 佐藤寒山、新・日本刀100選、秋田書店、平成20
- 図説、岡山県の歴史、河書房新社、1990
- ☆勝山小笠原家譜(信濃叢書に貞信まで、勝山市史に貞信以降所収)
- 信濃史料8、信濃史料刊行会、1968
- 西門蘭溪、菱実記聞、天保、安政の頃(福井大学図書館所蔵)
- 久松小学校HP、学校の沿革
- ★改正官員録(明治17年3月)
- 膳写本、勝山、小笠原古文書、明治17年写(東京大学史料編纂所蔵)
- ★今村長賀、別役成義、刀剣講話4、『古備前物作々の区別』、1903
- ☆佐藤賢一、沼田謙次編、銘刀押形、御物東博、日本美術刀剣保存協会、1958
- 膳写本、勝山、小笠原古文書、天保3年写(東京大学史料編纂所蔵)
- 小笠原文書(東京大学史料編纂所蔵)
- 読売新聞、明治21年11月6日他東京日日、毎日ほぼ同じ文面
- 朝日新聞、明治21年11月2日
- ☆安田仁一郎、勝山藩古事記、勝山藩古事記協賛会、昭和61
- 日本新聞、明治22年11月5日
- 読売新聞、明治22年11月26、27日別刷
- セキレイ、『厚藤四郎の明治から昭和の来歴と幻の国宝認定に関する考察』<http://wagtail.chagasi.com/atsushi.html>

- 膳写本、勝山、小笠原古文書、明治31年平井淳磨写
- 影写本、小笠原文書、東京大学史料編纂所編纂、2008年
- 読売新聞、明治32年7月5日、『足利義教の刀、鶯丸』
- ★今村長賀、別役成義、剣話録、下、『古備前物作々の区別』昭文堂、明治45
- 小倉惣右衛門著、名士と刀剣『加藤正義』初出・刀剣会誌昭和6年、日本刀講座別巻2『名士と刀剣』、雄山閣、昭和10所収
- 小倉惣右衛門著、名士と刀剣『宗重正』、初出・刀剣会誌昭和6年、日本刀講座別巻2『名士と刀剣』、雄山閣、昭和10所収
- 復刻叢書、日本刀価値考、光芸出版社編『愛刀家略伝』、光芸出版、平成15年11月
- ★官報、昭和6年12月4日(登録日も昭和6年12月4日付)
- ★官報、昭和23年10月29日(所有者変更は昭和22年12月11日付となっている。)
- 。国宝、重要文化財太刀、銘左衛門尉藤原国友、正中元年□月□日
- 九段刀剣談叢、今村長賀『九州の刀工』、中央刀剣会本部、第一輯、1926
- ★今村長賀『九州物の古刀』剣話録、下、明治45
- ★今村長賀、別役成義刀剣講話6、今村長賀『九州物』、1903
- 復刻叢書、日本刀価値考、光芸出版、平成15年
- 刀剣会誌19号、明治35年4月
- 九州国立博物館HP『対馬と宗家』
- 東京朝日新聞、明治32年7月11日
- ★松平定信、集古十種、兵器、刀剣、兵器刀剣1

- 辻本直男、刀剣人物誌『宗重正』、刀剣春秋、2012(昭和52から58までの「刀剣春秋」連載記事『人物刀剣史』を編集したもの)
- 読売新聞明治32年8月4日
- 小倉惣右衛門、名士と刀剣、『堀部直臣』初出・刀剣会誌昭和5年、日本刀講座別巻2『名士と刀剣』、雄山閣、昭和10所収
- ★維新風雲回顧録、田中光頭、昭和31
- ☆伯爵田中青山、田中伯伝刊行会編、昭和4年
- 高瀬羽軍、続刀剣談十一、東京日日新聞、明治42年8月21日
- 高瀬真卿(高瀬羽軍)、刀剣談、明治43
- ★市島謙吉、春城漫筆、『名刀の如き田中伯』早稲田大学出版部、1926
- 明治天皇紀8巻、宮内庁編、1968-1977
- 明治の光輝―明治150年記念展―、熱田神宮、平成30
- 読売新聞、明治40年11月21日
- セキレイ、『うへひす新聞』<http://wagtail.chagasi.com/meiji.html>
- ☆『明治の刀界』佐藤幸彦、著、刀剣と歴史617-619、平成9年、または佐藤幸彦刀剣論文集に所収[54]を事項毎にわたった年表を再編している。日付に関しては、元資料のまま。
- 斎藤西男治、『刀剣年表稿(維新後)』、刀剣と歴史86-96、大正6-7
- 東京朝日新聞、明治40年11月5日
- ★明治四十年特別大演習茨城県記録、茨城県、明治42
- 東京朝日新聞、昭和3年6月8日
- ☆吉川恒太郎、刀剣と歴史417、『研師の回顧』、1964
- やまと新聞、大正3年12月5日

38

- ☆千鳥庵主人、刀剣と歴史457、『明治天皇と刀剣(下)』、1968
- 公文書、小笠原長育元服ノ届、明治6年
- 東京全図、明治9年
- ★華族別譜、明治14、17年版参照
- ★紳士録、第1、5、9、12参照
- 読売新聞、明治20年2月9日
- 読売新聞、明治23年4月24日
- 曾我祐準、軍備要論、小笠原長育出版、明治23年11月
- 読売新聞、明治24年12月17日
- 森岡清美『明治維新时期における藩祖を祀る神社の創建』、淑徳大学社会学部研究紀要(37)、125-148、2003
- 福井県神社庁HP、神明神社
- ☆松本市史、上、松本市、昭和8年
- セキレイ、『鶯丸太刀祭りについて』文獻から見る伝承『<http://wagtail.chagasi.com/ugui-fe2019/index.html>』
- セキレイ、『鶯丸という現象』資料から読み解く鶯丸の姿『<http://wagtail.chagasi.com/hyoka.html>』
- 日本美術刀剣保存協会、1968。
- 日本刀を研ぐ研師の技・眼・心、永山光幹、雄山閣出版、1998
- ★刀剣鑑定秘話、本阿弥光遜、金竜堂、昭和17
- 福永酔剣、日本刀大百科事典、巻1『鶯丸』、1993
- 文化遺産データベース、太刀へ銘備前国吉岡住左近将監紀助光／一(南无八幡大菩薩／南无妙見大菩薩)元亨二年三月日
- 刀の手引き、川口陟、南人社、昭和8年11月

- 参考文献の記述に関して、国会図書館デジタルコレクションにおいて閲覧可能なものには★(フリー)、☆(図書館送信)の印をつけた。また、参考文献における該当箇所を明らかにするため章・節等のタイトルを付与している場合は、『』を使用している。
- 明治時代の新聞検索は朝日新聞(聞蔵Ⅱ)、読売新聞(ヨミダス)、東京日日新聞、毎日新聞(毎策)を利用した。
- 表記の諸注意**
- 参考文献・引用部分**
- 重要な部分の参考文献はなるべく当該箇所の原文を示しフォントを変える。本文中に参考文献名を示すときは【】で括り、章・節のタイトルは『』で括る。原文を全部載せると冗長になる場合の省略や筆者(セキレイ)による補足説明等は『』で囲み、フォントを変える。
- 【東京朝日新聞、明治21年11月6日】[18] 友成の作よりも『略名刀』より云々』今度靖国神社境内なる遊就館より出品して来る六日の大祭より諸人の縦覧を許すよし
- 旧字・旧仮名・判別不明文字**
- 参考文献として明治時代や戦前に出版された資料を多く利用している。旧字や旧仮名は現代に使用されているものに置き換えている場合もある。印刷による文字の潰れ、代替文字のわからない旧字等判別不明文字には■を代用する。
- 事象・時系列の検証と推測**
- 本レポートは、資料を元に事象・時系列の検証を行っている。個人的な推測の部分は、推測であることがクリアになるように記述するようにしているがまとまりのない文章になってわかりにくいところもあるがご容赦願いたい。

- 辻本直男、刀剣人物誌『堀部直臣』、刀剣春秋、2012(昭和52から58までの「刀剣春秋」連載記事『人物刀剣史』を編集したもの)
- 国会図書館HP、近代日本人の肖像、益田孝
- 小倉惣右衛門『続名士と刀剣37・38益田孝』刀剣会誌39、40昭和14年4、5月号
- 日本銀行HP(歴代総裁)第五代総裁山本達雄
- 読売新聞、昭和5年4月24日
- 読売新聞、昭和5年4月17、18、20、21日
- 寛政重修諸家譜巻第二百四十二
- 刀剣会誌、第十三号、明治34年10月発行
- ★官報、明治29年3月10日
- ★赤塩精、催眠術医術治病新論…一名・治病哲学、明治38
- 辻本直男、刀剣人物誌『中島勝義』、刀剣春秋、2012(昭和52から58までの「刀剣春秋」連載記事『人物刀剣史』を編集したもの)
- 山本達雄、山本達雄先生伝記編纂会(信越化学工業株式会社内)、1951
- ☆市村威人、勝山小笠原文書について『信濃第2次・54、55号』
- ☆弘道189号、日本弘道会、1907、12。
- ☆『鶯丸押形』、刀剣と歴史423号。
- ☆国宝日本刀特別展目録、刀剣博物館開館記念、小笠原信夫、御剣、毎日新聞社、1998.4
- 福永酔剣、日本刀大百科辞典2『小龍景光』、1993
- ★遊就館年報昭和13年度『臨時出品』
- (他の年では軍刀であった刀剣は軍刀であったことが明記されている)
- 『日本刀の衰亡』、東京朝日新聞、明治45年3月20日

39

あとがき

ここまで読んで頂きありがとうございます、というか、長々とお疲れ様です。この一年半に集めた資料をつらつらと並べた自身の備忘録的レポートになってしまいました。諸説の白黒を検証し、なるべくエモさを排除しておりますので文章としては面白みに欠けそうですがアドバンス的な鶯丸研究や、創作活動等にも活用いただけます。さて本研究から一冊推薦図書あげるのであれば「伯爵田中青山」です。調査沼に入って刀剣関連の文獻の調べ方も分からない最初の最初に運良く出合う事ができ、田中伯の刀剣への情熱と明治刀剣界への貢献を知り、その田中伯が献上した鶯丸は素晴らしい刀剣なのだろうと思えました。

明治以前を中心とした「小笠原家の重宝鶯丸と小笠原文書」に関するレポートは刀剣ブレン&アンロジータwitter@KatanaPshBookやまに寄稿予定です(2020.3発行予定)。web siteでは本稿のPDFの他、参考文献にあげたものもろの筆者のレポートが掲載されています。そちらもご利用ください。

著者 セキレイ
Twitter @WagtailW
発行 令和元年霜月

Web site - 月日星 - 〆意見〆感想等 - お題箱 -



無断転載・無断転用を禁止します